The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	石窟史料からみた敦煌オアシス地域の研究
Author(s)	坂尻, 彰宏
Citation	
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/94646
rights	
Note	

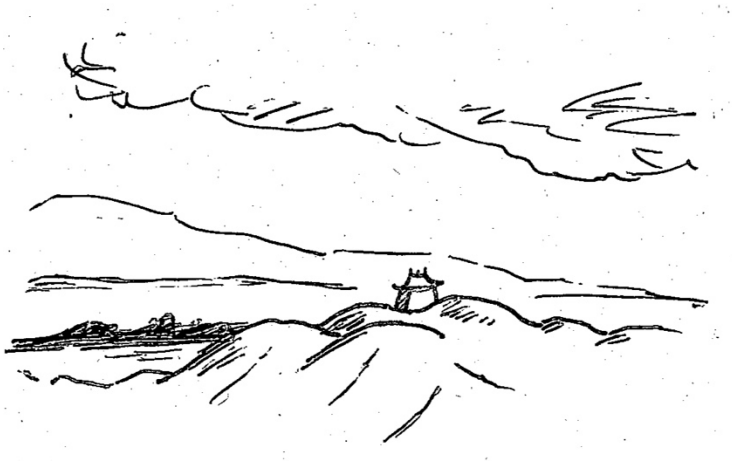
The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

石窟史料からみた
敦煌オアシス地域の研究

坂尻彰宏（編）



2020 年度～2023 年度科学研究費補助金（基盤研究（B））
「石窟史料からみた敦煌オアシス地域の研究」（課題番号 20H01326）成果報告書
研究代表者：坂尻彰宏（大阪大学）

2024 年 3 月

はしがき

本報告書は，2020 年度〜2023 年度科学研究費補助金（基盤研究（B））「石窟史料からみた敦煌オアシス地域の研究」（課題番号 20H01326）の研究成果報告書である．本研究は代表者である坂尻彰宏（大阪大学）を中心に研究分担者と協力して行われた．本研究の研究分担者は以下の 8 名である．赤木崇敏（東京女子大学），岩尾一史（龍谷大学），岩本篤志（立正大学），橋堂晃一（龍谷大学），佐藤貴保（盛岡大学），島津弘（立正大学），田林啓（大阪市立美術館），檜山智美（国際仏教学大学院大学）．

本研究の目的は，イスラーム化以前のオアシス地域の生活圏・信仰圏の核となる仏教石窟寺院を歴史資料としてあつかい，歴史学的・美術史的・地理学的に分析することによって，7〜13 世紀の敦煌オアシス地域の歴史像を再構築することにあった．敦煌オアシス地域とは，中国・甘粛省西部の敦煌を中心とするオアシス地域である．本研究では，これまで主に典籍や出土文字史料を材料にして行われてきた敦煌オアシス地域の歴史研究の限界を打破するために，石窟寺院・石窟史料を視座にすえることを目指した．なお，本研究で用いる石窟史料とは，歴史資料としての石窟寺院の位置，景観，構造，壁画，仏像，供養人像，銘文等の総称である．そして，この目的を達成するため，本研究では中国での現地調査を複数回行い，多分野の研究者（歴史学，美術史学，仏教学，地理学）による共同研究を進めることを計画していた．

しかし，これらの目的・計画は 2019 年末から発生した新型コロナウイルス感染症（COVID-19）のパンデミックによって大きな変更を余儀なくされた．中国での現地調査は，中国への入国が長期間に渡り厳しく制限されていたため，最終年度の 2023 年度の調査のみにならざるを得なかった．そこで，2020 年度から 2022 年度にかけては日本国内で研究を進めるとともに，米国などの中国以外での海外資料調査によって，研究の進捗を図った．

本報告書は，以上のような目的・経緯で行われた研究をひとまずまとめ，さらに研究を進めていくための一里塚として作成された．今後も現地調査と共同研究を継続し，石窟史料を用いた敦煌オアシス地域の歴史像の再構築を目指したい．

坂尻彰宏（研究代表者・大阪大学）

目次

はしがき　坂尻 彰宏　i

敦煌研究院蔵「辛亥年臘八燃燈分配窟龕名数」文書のテキスト校訂
赤木 崇敏　1

文殊山石窟ウイグル語銘文についての覚書き　橘堂 晃一　11

米国所蔵の絹本画の基底材について　田林 啓　23

西夏時代の河西回廊西部〜中部における石窟寺院について
―― その分布と西夏による支配との関連性の考察を中心に ――
佐藤 貴保　33

中国・河西回廊西部の地形の特徴―― 石窟寺院の立地と関連して ――
島津 弘　41

河西石窟調査行動記録（2023 年度）　佐藤 貴保・坂尻 彰宏　51

敦煌研究院蔵「辛亥年臘八燃燈分配窟龕名数」文書のテキスト校訂

赤 木　崇 敏

1．はじめに

表題に掲げた敦煌文献「辛亥年臘八燃燈分配窟龕名数」とは，1931 年に呉曼公が北京にて入手し，のちに敦煌研究院（当時は敦煌文物研究所）に寄贈した漢文文書で，現在は敦研 322（Dh322, Dy.322）の所蔵番号が付されている．その内容は，辛亥年（951 年）の臘八会（釈迦が成道した 12 月 8 日に開かれる法会）を迎えるにあたり，三界寺僧・道真が莫高窟の 677 箇所の窟龕に燈明を供えるよう僧俗の社人に指示したものである．莫高窟から発見された敦煌文献には，意外にも莫高窟の造営や管理に関する直接的な史料はそれほど多くない．しかし本文書では，莫高窟南区は計 11 の区域に区分され，主要な窟には名前が付けられ，さらに配置される燈明の数から大窟・小窟の区別が付く．そのため，呉曼公［1959］が本文書を紹介して以来，10 世紀半ばの莫高窟の状況や社による保護運営のあり方を知りうる希有な史料として学界の注目を集め，多数の研究が発表されてきた．

ただし，本文書を扱うにあたっては大きな問題がある．それは，複数の先行研究が発表した録文にはそれぞれ大小の異同があり，これらを整理・校訂した統一テキストがないことである．この異同は，文書の要所で墨跡が薄かったり，文字の書き直しや削れがあったり，また別紙により一部の文字が覆い隠されていたりするために，判読が容易ではないことに起因している．また，既刊の図版では，寸法が小さくかつ細部が不鮮明なこともあり，先行研究の読みの検証は難しい．

筆者は 2006 年に本文書を調査する機会を得て，短い時間であったが文書の状態や字句を観察できた．その後，2023 年に本科研の調査で敦煌を再訪したおり，偶然にも敦煌石窟文物保護研究陳列中心にて一般展示されていた本文書を改めて実見した．筆者の読みは諸先学のそれを大きく変えるものではなく，かついまだ十分判読できない箇所も残っているが，今後の研究に資するために，主な先行研究を整理して現時点での校訂テキストを提示したい．

2．基礎情報と先行研究

（1）基礎情報

本文書は，廃紙となった『大般若波羅蜜多経』の紙背を利用して書かれたもので，現在はこの仏典が裏面（敦研 322v）とされている．『甘粛蔵敦煌文献』の解題［p. 304］によれば，本文書の寸法は縦 24.9 cm × 横 47 cm．実見したところ，料紙はやや薄手の中上質紙で，印影はない（呉曼公の所蔵印を除く）．本文は漢文で行数は全 17 行（『甘粛蔵敦煌文献』は全 18 行とする）．1〜2 行目が標題となっており，3〜13 行目には窟龕に燈明を配備する社人の名前が列挙され，その名前の下には各社人の担当区域の範囲や割り当てられた盞（燈明を灯す皿）の数が細字で各行 1〜3 行ずつ記されている．14〜17 行目は道真が社人に与えた注意や罰則である．また，文書の左端には，原所蔵者である呉曼公の跋文が 5 行分あり，「丁酉（1957 年）八月朔」の日付がある．

形態上の特徴として，上述のように，本文書は墨跡が薄いため文字を判読しにくい箇所がある．また，料紙には右端，上端の一部，左端に別紙が貼り付けられており，そのため 1〜9 行目の 1 文字目はこの別紙によって部分的ないし完全に覆い隠されている．そのほか，字句を訂正・加筆した跡が数箇所あり（3，9，13，14 行目），紙背利用されていることも勘案すれば，本文書は実際に社人に発せられたものではなくその草稿であった可能性もある．

本文書の年代については，1 行目冒頭に「庚戌年」とあるいっぽうで，17 行目には「辛亥年十二月七日釋門僧政道真」とあり，紀年にずれが生じているが，多くの研究では後者の辛亥年を文書の作成年としている．本文書を最初に紹介した呉曼公［1959, p. 49］は辛亥年を唐代（651，711，771，831，891 年）に求め，また金維諾［1959, p. 54］は大中祥符 4 年（1011 年）にあてた．しかし，竺沙雅章［1961＝1982・2002, p. 376］と孫修身［1983, p. 214］はそれぞれ辛亥年を 951 年と決定し，以後これが定説となっている．また，文書発信者の道真とは，10 世紀の仏教教団において僧正（僧政）・都僧録など顕要なポストを歴任した三界寺の僧・道真のことであり，950 年頃に教団の僧官である僧政となったことが知られている[1]．

---

[1] 道真の事績については，第 2 節（3）の文献リストに挙げた竺沙 1961［＝1982・2002, pp. 375-377］，孫 1983, pp. 210-212 のほか，施萍婷「三界寺・道真・敦煌蔵経」段文傑（主編）『1990 年敦煌学国際研討会文集・石窟考古編』遼寧美術出版社, 1995, pp. 178-210［再録：施萍婷『敦煌習学集』上，甘粛民族出版社, 2004, pp. 140-169］，李正宇「道真」季羨林（主編）『敦煌学大辞典』上海辞書出版社, 1998, p. 365 に詳しい．

（２）図版

本文書については，以下の文献で図版が公刊されている（発行年順）．

・呉曼公「敦煌石窟臘八燃灯分配窟龕名数」『文物』1959-5, 1959, 巻頭図版.
・土肥義和「莫高窟千仏洞と大寺と蘭若と」池田温（編）『敦煌の社会』（講座敦煌 3）大東出版社, 1980, p. 353.
・唐耕耦・陸宏基（編）『敦煌社会経済文献真蹟釈録』1, 書目文献出版社, 1986, p. 393.
・Tatsuro Yamamoto, Yoshikazu Dohi, Yusaku Ishida (eds.), *Tun-huang and Turfan Documents: concerning Social and Economic History 4 She Associations and Related Documents* (B), The Toyo Bunko, 1988, p. 139 (No. 284).
・敦煌研究院（編）『敦煌』甘粛人民出版社・江蘇美術出版社, 1990, p. 264, 図 285（カラー図版）.
・水野敬三郎他（編）『砂漠の美術館――永遠なる敦煌：中国敦煌研究院創立 50 周年記念』朝日新聞社, 1996, p. 146（カラー図版）.
・馬徳『敦煌莫高窟史研究』甘粛教育出版社, 1996, 巻頭図版.
・段文傑（主編）『甘粛蔵敦煌文献』2, 甘粛人民出版社, 1999, p. 14.
・敦煌研究院（編）『敦煌研究文集――敦煌研究院蔵敦煌文献研究篇』甘粛民族出版社, 2000, 巻頭図版 13.
・施萍婷『敦煌習学集』上, 甘粛民族出版社, 2004, 巻末図版 69.
・沙武田『帰義軍時期敦煌石窟考古研究』甘粛教育出版社, 2016, p. 98（カラー図版）.

（３）録文

本文書の録文を発表した主な研究を発行年順に列挙する[2]．次節のテキストの校訂では，以下の先行研究との異同について注記している．なお，＊は全文でなく一部のみの移録であることを示す．

呉　曼公　1959　「敦煌石窟臘八燃灯分配窟龕名数」『文物』1959-5, p. 49〔再録：敦煌研究院（編）『敦煌研究文集――敦煌研究院蔵敦

[2] 水野敬三郎他（編）『砂漠の美術館――永遠なる敦煌：中国敦煌研究院創立 50 周年記念』朝日新聞社, 1996, p. 146, 郝春文『中古時期社邑研究』新文豊出版, 2006, p. 165 および郝春文・陳大為『敦煌的仏教与社会』（敦煌講座書系）甘粛教育出版社, 2013, pp. 298-299 にも全文が移録されているが，水野他 1996 は土肥 1980 の録文の引用，郝 2006 と郝・陳 2013 は寧・郝 1997 の録文の引用である．

煌文献研究篇』甘粛民族出版社, 2000, pp. 320-321〕.

＊金　維諾　1959　「敦煌窟龕名数考」『文物』1959-5, pp. 50-54, 61〔再録：敦煌研究院（編）『敦煌研究文集――敦煌研究院蔵敦煌文献研究篇』甘粛民族出版社, 2000, pp. 322-335〕(1〜13 行目のみ）.

＊竺沙雅章　1961　「敦煌の僧官制度」『東方学報（京都）』31, p. 194・注 82〔再録：『中国仏教社会史研究』同朋舎, 1982, p. 419・注 69;『増訂版　中国仏教社会史研究』朋友書店, 2002, p. 419・注 69〕(14〜17 行目のみ）.

土肥義和　1980　「莫高窟千仏洞と大寺と蘭若と」池田温（編）『敦煌の社会』(講座敦煌 3）大東出版社, pp. 351-352〔再録：「燉煌仏教教団十六大寺から十八大寺の成立と蘭若」『燉煌文書の研究』汲古書院, 2020, pp. 429-430〕.

孫　修身　1983　「敦煌石窟《臘八燃燈分配窟龕名数》写作時代考」絲綢之路考察隊（編）『絲路訪古』甘粛人民出版社, p. 215〔再録：敦煌研究院（編）『敦煌研究文集――敦煌研究院蔵敦煌文献研究篇』甘粛民族出版社, 2000, pp. 348-349〕.

『真蹟釈録』＝ 唐耕耦・陸宏基（編）『敦煌社会経済文献真蹟釈録』1, 書目文献出版社, 1986, p. 393.

TTD ＝ Tatsuro Yamamoto, Yoshikazu Dohi, Yusaku Ishida (eds.), *Tun-huang and Turfan Documents: concerning Social and Economic History 4 She Associations and Related Documents* (A), The Toyo Bunko, 1989, pp. 132-133 (No. 284).

郝　春文　1990　「隋唐五代宋初仏社与寺院的関係」『敦煌学輯刊』1990-1, pp. 17-18.

施　萍婷　1990　「臘八燃燈分配窟龕名数単」敦煌研究院（編）『敦煌』甘粛人民出版社・江蘇美術出版社, p. 291.

馬　徳　1990　「10 世紀中期的莫高窟崖面概観――関于《臘八燃灯分配窟龕名数》的幾个問題」段文傑（主編）『1987 敦煌石窟研究国際討論会文集・石窟考古編』遼寧美術出版社, pp. 41-42.〔再録：敦煌研究院（編）『敦煌研究文集――敦煌研究院蔵敦煌文献研究篇』甘粛民族出版社, 2000, pp. 351-352〕.

馬　徳　1996　『敦煌莫高窟史研究』甘粛教育出版社, p. 147.

寧可・郝春文　1997　『敦煌社邑文書輯校』江蘇古籍出版社, pp. 281-282.

＊『甘粛蔵敦煌文献』＝ 段文傑（主編）『甘粛蔵敦煌文献』2, 甘粛人民出版社, 1999, p. 304（1〜2, 14〜17 行目のみ）.

孟　憲実　2009　『敦煌民間結社研究』北京大学出版社, pp. 117-118.
郭　俊葉　2019　「敦煌文書《辛亥年臘八燃灯分配窟龕名数》中的法華塔考」『敦煌研究』2019-1, pp. 30-31.

3．テキストの校訂

1　庚戌年[3]十二月八日夜[4]□土 内?[5]社[6]人遍窟 然(燃)[7]燈

2　分[8]配窟龕名數

3　田[9]闍梨　北[10]大像已[11]北至司徒窟，計[12]六十一[13]盞．張都衙[14]窟両盞，大王天公主[15]窟各[16]

両盞，大像下層両[17]盞，司徒[18]両盞，大像天王[19]四盞．

3　庚戌年：土肥 1980 は「辛 亥 年」と推定復元し，『甘粛蔵敦煌文献』も「辛亥年」とするが，墨跡が薄いものの「庚戌年」と判読できる．なお，TTD はこの 3 文字が抹消されているとするが，そのような痕跡は見られない．

4　夜：文字の左半分しか見えないが，呉 1959 は「□（夜）」，他の先行研究は全て「夜」と読む．

5　□土 内？：3 文字分の残画があり，そのうち 2 文字目は土偏が確認できる．呉 1959 は「□□」，金 1959 は「□（壠）□（沙）」，郝 1990 は「燃 灯」，その他多くの録文は「□□□」とするが，ここでは TTD の読みに従う．

6　社：文字の左半分しか見えないが，呉 1959 は「□（社）」，他の先行研究は全て「社」と読む．

7　然：金 1959，孫 1983，郝 1990，馬 1990，馬 1996，『甘粛蔵敦煌文献』，孟 2009，郭 2019 は「燃」と読み替える．

8　分：施 1990 は「分」とする．

9　田：別紙により覆い隠されている．呉 1959，TTD は「□」，金 1959 は「□（向）」，施 1990 は「田」，その他の研究は全て「田」と読む．

10　北：呉 1959 が指摘するように，「南」を抹消してその右に「北」と訂正している．土肥 1980，『真蹟釈録』は「南」の右横に「北」と書き加えるも，「南」が抹消されていることを注記していない．一方，金 1959，馬 1990，馬 1996，郭 2019 は「南」のままとし，「北」を移録していない．

11　已：馬 1990，馬 1996 は「以」とする．

12　計：馬 1990 は移録していない．

13　六十一：「六」「一」は上から書き直している．

14　衙：呉 1959 は「□（衙）」，孫 1983，施 1990 は「衙」とする．

15　主：施 1990 は移録していない．

16　各：呉 1959，金 1959，TTD は「□」とするが，実見したところ「各」と読める．なお，土肥 1980 は移録していない．

17　両：馬 1990 は「四」とする．

18　司徒：馬 1990，馬 1996 は「司徒窟」とするも，「窟」字はない．

19　大像天王：孫 1983 は「天像大王」とする．

4 李　禪[20] 司徒[21]北至靈圖寺[22]，六十窟．翟家窟両盞，杜家[23]窟両鑵[24]，宋家窟両鑵[25]，文殊堂両盞．

5 張[26]僧政 崖下獨煞神[27]至狼子神堂[28]，六十鑵[29]．獨煞神[30]五[31]盞．

6 價[32]法律 弟(第)[33]二層陰[34]家窟至文殊窟[35]，上[36]層令狐[37]杜家[38]窟，六十五盞．内三聖

---

20 李禪：1 文字目は上端が別紙により覆い隠されている．呉 1959，金 1959 は「□(李)禪」，施 1990 は「李禪」とし，郝 1990 は「李禪（師)」と「師」を補う．

21 司徒：馬 1990，馬 1996 は「司徒窟」とするも，「窟」字はない．

22 靈圖寺：馬 1990 は「靈圖寺〔窟〕」，馬 1996 は「靈圖寺窟」と「窟」を補う．

23 杜家：この語は先行研究の間で「杜家」または「社衆」と読みが大きく分かれる．呉 1959，土肥 1980 は「□家」，金 1959 は「□（社）□（衆)」，孫 1983，『真蹟釈録』，寧・郝 1997，孟 2009 は「社衆」，TTD，郝 1990，施 1990，馬 1990，馬 1996，郭 2019 は「杜家」とする．実見したところ，2 文字目は「家」と読めるため，6 行目と同じく「杜家」と判断した．なお，金 1959［p. 61, 注 3］は 2 文字目が「家」に似ることを指摘し，社家は社戸と同義で社人による合修窟であると述べる．

24 鑵：孫 1983 は「銭（盞？)」とし，その他の先行研究は全て「盞」とするが，明らかに金偏が見える．

25 鑵：先行研究は全て「盞」とする．

26 張：別紙により上半分が覆い隠されているが，呉 1959，金 1959 は「□（張)」，土肥 1980 は「張？」，施 1990 は「□」とし，その他は全て「張」とする．

27 獨煞神：馬 1990 は「獨煞神〔祠〕」と「祠」を推測により補う．

28 狼子神堂：施 1990 は「狼子神堂」とし，孟 2009 は「神」を移録せず「狼子堂」とする．

29 鑵：土肥 1980 のみ「窟」とし，その他は全て「盞」とする．

30 獨煞神：馬 1990 は「獨煞神〔祠〕」と「祠」を推測により補う．

31 五：呉 1959，金 1959 は「□（五)」とする．

32 價：別紙により上半分が覆い隠されている．呉 1959，土肥 1980，孫 1983，『真蹟釈録』，施 1990 は「□」，金 1959 は「□（陰)」，TTD は「陰」，郝 1990，馬 1990，馬 1996，寧・郝 1997，孟 2009，郭 2019 は「陰」とするが，読み改めた．價法律の名は 10 世紀前半の敦煌文献 P.ch.2914（938？年）や S.4642v（923 年以降）にも見える［cf. 土肥義和（編)『八世紀末期～十一世紀初期 燉煌氏族人名集成 氏族人名篇・人名篇』汲古書院, 2015, p. 131］．

33 弟：施 1990 は「弟」，郭 2019 は「弟（第)」とし，その他は全て「第」とする．

34 陰：施 1990 は「陰」とする．

35 文殊窟：墨跡は薄いが 10 行目との比較から判読できる．呉 1959 は「□（文）□（殊）窟」，土肥 1980 は「文？殊窟」，TTD は「文殊窟」，施 1990 は「文殊窟」，馬 1990，馬 1996 は「文殊堂」とする．

36 上：施 1990 は「上」とする．

37 令狐：呉 1959 は「□（令）□（狐)」とする．

38 杜家：呉 1959，土肥 1980 は「□家」，金 1959 は「□（社）□（衆)」，孫 1983 は「柱家」，TTD は「杜？家」，郝 1990 は「社衆」，施 1990 は「杜家」，馬 1990，馬 1996，寧・郝 1997，孟 2009，郭 2019 は「社衆」と読みが分かれる．なお，『真蹟釈録』は「杜」を移録していない．

小龕，各 然(燃)[39]一盞.

7　羅[40]闍梨　弟(第)[41]三層[42]太保窟至七仏堂，八十二[43]窟．内有三聖刹心[44]，各 然(燃)[45]一盞.

8　曹[46]都頭　呉和尚[47]已[48]南至[49]天龍八部窟，計八十窟．刹[50]心内龕，惣[51]在裏邊.

9　索[52]幸者　弟(第)[53]二層至 弟(第)[54]三層□家[55]八金光窟，八十窟．内龕刹[56]心，惣[57]在裏邊.

39　然：金 1959，孫 1983，郝 1990，馬 1990，馬 1996，孟 2009 は「燃」とする.

40　羅：別紙により上半分が覆い隠されている．呉 1959，金 1959 は「□（羅）」，施 1990 は「羅」とし，その他は全て「羅」とする.

41　弟：『真蹟釈録』，施 1990 は「弟」，寧・郝 1997，郭 2019 は「弟（第）」とし，その他は全て「第」とする.

42　層：『真蹟釈録』は「窟」とする.

43　八十二：郝 1990 は「八十一」，施 1990 は「八十二」とする.

44　刹心：呉 1959 は「□（刹）□（心）」，孫 1983 は「刹心」，施 1990 は「剎心」とする.

45　然：金 1959，孫 1983，郝 1990，馬 1990，馬 1996，孟 2009 は「燃」とする.

46　曹：別紙により上半分が覆い隠されている．呉 1959 は「□」，金 1959 は「□（曹）」，土肥 1980 は「曹？」，TTD，施 1990 は「曹」とし，その他は全て「曹」と読む.

47　呉和尚：孫 1983，郭 2019 は「呉和尚窟」とするが，「窟」字はない．また，馬 1990 は「呉和尚〔窟〕」と「窟」を推測により補う.

48　已：孫 1983，馬 1990 は「以」とする.

49　至：孟 2009 は移録していない.

50　刹：施 1990 は「剎」とする.

51　惣：呉 1959，金 1959，土肥 1980 は「然」，郝 1990，孟 2009 は「燃」，馬 1990，馬 1996，寧・郝 1997，郭 2019 は「総」とする.

52　索：別紙により上半分が覆い隠されている．呉 1959，金 1959 は「□（索）」，土肥 1980，TTD，施 1990 は「索」とし，その他は全て「索」とする.

53　弟：施 1990 は「弟」，郭 2019 は「弟（第）」とし，その他は全て「第」とする.

54　弟：先行研究は全て「第」とする.

55　□家：1 文字目は上から書き直したような痕跡があり，非常に読みにくい．呉 1959 は「□□（家）」，金 1959，土肥 1980，孫 1983，『真蹟釈録』，郝 1990，施 1990，寧・郝 1997，孟 2009 は「□家」，TTD は「陳？家」，馬 1990，馬 1996，郭 2019 は「宋家」とする.

56　刹：施 1990 は「剎」とする.

57　惣：呉 1959，金 1959，土肥 1980 は「然」，郝 1990，孟 2009 は「燃」，馬 1990，馬 1996，寧・郝 1997，郭 2019 は「総」とする.

10 陰[58]押衙[59]・梁僧政 弟(第)[60]二層普門[61]窟至文殊堂，又至[62]靈圖寺窟，至[63]陳家窟，

六十三窟．有三聖龕[64]，惣[65]在裏邊．

11 王行者 南頭弟(第)[66]二[67]層，六十二[68]窟．何法[69]師窟両盞，刹[70]心仏堂両盞，大像[71]

上層四盞，

至法花(華)塔[72]．

---

58 陰：施 1990 は「陰」とする．

59 押衙：孟 2009 は「都衙」とする．

60 弟：『真蹟釈録』，施 1990 は「弟」，寧・郝 1997，郭 2019 は「弟（第）」とし，その他は全て「第」とする．

61 普門：馬 1990，馬 1996，郭 2019 は「普門」と読むが，「門」は墨跡が薄くまた料紙の状態が悪いために判読し難い．土肥 1980，TTD に従い「普門」とする．なお，呉 1959，金 1959 は「□（普）□」，その他は「普□」とする．

62 至：金 1959 はこの「至」は「自」の誤りとする．

63 至：上から書き直している．金 1959 は「□（至）」とする．

64 龕：『真蹟釈録』は「窟」とする．

65 惣：呉 1959，金 1959，土肥 1980 は「然」，郝 1990 は「燃」，馬 1990，馬 1996，寧・郝 1997，孟 2009，郭 2019 は「総」とする．

66 弟：『真蹟釈録』，施 1990 は「弟」，寧・郝 1997 は「弟（第）」とし，その他は全て「第」とする．

67 二：土肥 1980 は「三」とする．

68 六十二：呉 1959，土肥 1980，郭 2019 は「六十」とする．

69 法：呉 1959，金 1959 は「□（法）」，土肥 1980，TTD は「法」とする．

70 刹：施 1990 は「剎」とする．

71 像：呉 1959，金 1959 は「象」とする．

72 至法花塔：墨跡が薄くまた料紙の状態も悪いが，かろうじて読める．呉 1959 は「至□花□」，金 1959 は「至□（法）花□（塔）」，土肥 1980 は「至？□花？□」，孫 1983 は「至法花□」，『真蹟釈録』は「至法花」，TTD は「至法花塔」，郝 1990 は「至法花塔」，施 1990，寧・郝 1997，孟 2009 は「至法花□」，馬 1990，馬 1996 は「至法華塔」，郭 2019 は「至法花（華）塔」とする．また，金 1959 と郝 1990 は直前の「上層四盞」に続けて読むのではなく，それぞれ「南頭第二層至□（法）花□（塔）六十二窟」，「南頭第二層至法花塔六十二窟」と移録している．

12　安[73]押衙・杜[74]押衙　呉[75]尚窟[76]至天王堂，卅[77]六窟．呉和尚窟三盞，七仏[78]七盞，天王堂
両盞．

13　喜[?]成[79]郎君[80]　陰家窟至南大像[81]，五十二鑞八龕[82]．陰家窟三鑞[83]，王家[84]両鑞[85]，宋家[86]窟両盞，李家窟[87]三盞，大像[88]四[89]盞，呉[90]家窟四盞，大像[91]天王四鑞[92]．

73　安：呉 1959，金 1959 は「□（安）」とする．
74　杜：呉 1959，金 1959 は「□」，孫 1983 は「杜」とする．
75　和：料紙の状態が悪いが，残画から「和」と推定しうる．呉 1959 は「□（和）」，土肥 1980 は「和」とし，その他は全て「和」とする．
76　窟：孟 2009 は移録していない．
77　卅：孫 1983 は「州」とする．
78　七仏：『真蹟釈録』は「七仏堂」，馬 1990 は「七仏〔堂〕」，馬 1996 は「七堂」とする．
79　喜？成：この 2 字は墨跡が薄く非常に読みにくい．呉 1959，金 1959，孫 1983，『真蹟釈録』，TTD，郝 1990，施 1990，寧・郝 1997，孟 2009 は「□□」，土肥 1980 は「□家？」とする．馬 1990，馬 1996，郭 2019 は「喜成」としており，確かに 2 文字目は「成」と読めるが，1 文字目は判断し難い．
80　郎君：2 文字目は墨跡が薄く読みにくい．呉 1959，孫 1983，『真蹟釈録』，寧・郝 1997，孟 2009 は「郎□」，金 1959 は「郎□（頭）」，土肥 1980 は「郎君」，郝 1990 は「郎頭」とするが，TTD，施 1990，馬 1990，馬 1996，郭 2019 と同じく「郎君」と読める．
81　像：金 1959 は「象」とする．
82　五十二鑞八龕：「八龕」の直前には「両」とあるも抹消されており，その右に「五十二鑞」と訂正している．土肥 1980，施 1990 を除く先行研究では，この抹消された「両」字を「□」（呉 1959，孫 1983，『真蹟釈録』，TTD，寧・郝 1997，孟 2009），「卅」（金 1959，郝 1990，馬 1990），あるいは「廿」（馬 1996，郭 2019）と移録している．なお，施 1990 は「五十二盞龕」とし，「八」字を移録していない．また，「鑞」について呉 1959 は「盞」字に金偏が付いていることを指摘するも，その他の研究では全て「盞」と移録する．
83　鑞：土肥 1980，TTD のみ「鑞」とし，その他は全て「盞」とする．
84　王家：孫 1983，郭 2019 は「王家窟」とするが，「窟」字はない．
85　鑞：土肥 1980，TTD のみ「鑞」とし，その他は全て「盞」とする．
86　宋家：2 文字目は読みにくいが残画から「家」と判断しうる．呉 1959，土肥 1980 は「宋□」とし，その他は全て「宋家」とする．
87　李家窟：この 3 字は墨跡が非常に薄く，また料紙の状態も悪い．2・3 文字目は残画から「家窟」と判断しうる．呉 1959，土肥 1980 は「□□□」，その他は全て「李家窟」とする．
88　像：金 1959 は「象」とする．
89　四：上から書き直している．
90　呉：上から書き直している．
91　像：金 1959 は「象」とする．
92　鑞：土肥 1980，TTD のみ「鑞」とし，その他は全て「盞」とする．

14 右件社人，依其所配，好生精[93]心注灸[94]，不得懈愒[95]

15 觸穢．如有闕然(燃)[96]及穢不盡[97]者，匠[98]人罰布一尺[99]，

16 充為工廨[100]，匠[101]下之人，痛決尻杖[102]十五，的无[103]容[104]免．

17 辛亥年十二月七日釋[105]門僧政道真．

---

93 精：呉 1959 は「□（精）」とする．

94 灸：竺沙 1961，土肥 1980，孫 1983，『真蹟釈録』，施 1990 は「救灸」としているが，呉 1959 が既に指摘しているように，「救」の上には抹消を示す点が打たれており，その右下に「灸」を加筆している．なお，馬 1990，馬 1996 は「炙」とする．

95 愒：土肥 1980，孫 1983，TTD，施 1990 は「愒」とし，その他は全て「怠」とする．

96 然：郝 1990，馬 1996，孟 2009 は「燃」とする．

97 盡：孫 1983，『真蹟釈録』，馬 1990 は「盡（浄）」とし，馬 1996，孟 2009 は「浄」と読みかえる．

98 匠：呉 1959，孫 1983，施 1990，馬 1990，『甘粛蔵敦煌文献』は「近」とする．

99 尺：先行研究では「尺」と「疋（匹）」で読みが分かれる．呉 1959，竺沙 1961，土肥 1980，TTD，郭 2019 は「尺」とするいっぽう，孫 1983，郝 1990，馬 1990，馬 1996 は「匹」，『真蹟釈録』，施 1990，寧・郝 1997，『甘粛蔵敦煌文献』，孟 2009 は「疋」とする．しかし，契約文書 P.ch.3458（941 年）や P.ch.2504v（951 年）などにおける「尺」と「疋」の書き分けを見れば，本文書も「尺」と読むべきであろう［cf. 唐耕耦・陸宏基（編）『敦煌社会経済文献真蹟釈録』2, 全国図書館文献縮微複製中心・古佚小説会, 1990, pp. 119, 124］．

100 工廨：寧・郝 1997 は「工（公）廨」，孟 2009 は「公廨」とする．

101 匠：呉 1959，孫 1983，施 1990，馬 1990，『甘粛蔵敦煌文献』は「近」とする．

102 杖：孫 1983 は「枚」とする．

103 无：呉 1959 は「天」とする．

104 容：呉 1959 は「□（容？）」，孫 1983 は「容」とする．

105 釋：呉 1959 は「□」とする．

文殊山石窟ウイグル語銘文についての覚書き

橘堂　晃一

1．はじめに

ウイグル仏教の歴史的展開を語るとき，その最晩期の残照として必ず言及されるのが『金光明最勝王経』（Uig. *altun öŋlüg y(a)ruq qopda kötrülmiš nom iligi atly nom bitig*. 金色の光明ある，すべてに勝れる，経の王という名の経典．以下，AYS とする）である．これは 11 世紀頃に活動したベシュバリク出身のシンコ・シェリ・トゥトゥング（Uig. Šıŋqo Šäli Tutuŋ < Chin. 勝光闍梨都統）によって義浄訳からウイグル語に翻訳され，ウイグル仏教徒の間で長く伝持された経典である．

敦煌・トゥルファン地域から収集された AYS の多種の写本，版本の断片のなかでも，S. マーロフが粛州で入手した写本（以下マーロフ本 AYS）は，とりわけ重要である．1910 年，粛州付近の新しい洞窟寺院にガラクタのように置かれていた 235 葉と現地の人間から入手した 162 葉の合計 397 葉という分量は，ウイグル語仏教写本として最もまとまった内容を保存する．しかも第一，三，四，五，六，七巻の奥書には，大清康熙 26 年（西暦 1687 年）に書写されたことが記されている．これは現在知られているウイグル語仏典として最も新しい写本である．これに次ぐ新しい紀年を有する資料は，至正 24 年（西暦 1361 年）の紀年をもつ印刷仏典である[1]．両者の間には約 300 年の隔たりがあり，マーロフ本 AYS の特殊性を際立たせている．

マーロフは，写本の入手場所について，Vunfygu～Vunšingu という中国人の集落の一寺院でこれらを入手したと記録している[2]．これが「文殊口」の音写であることは，夙に濱田正美によって指摘されているところである[3]．ここに言う文殊口の仏教寺院とは，現在，全国文物保護単位に指定されている文殊山石窟のことである．

1　ツィーメ・百濟 1985，31-32 頁．
2　Radlov, Malov 1913, pp. I-II.
3　濱田 1983，702 頁．

近年，文殊山石窟の前山区万仏洞において，明嘉靖 3 年（1524）から清康熙 52 年（1713）の間に書かれたウイグル語銘文 14 条のテキストと訳注が，伊斯拉菲尔・玉素甫と張宝璽によって発表された[4]．とりわけ我々を驚かせたのが，銘文に記された Bilgä Taluy Toyïn なる僧侶の名が，マーロフ本 AYS の識語にも写経者・施主の一人として見えており，どうやら同一人物の可能性があることであった[5]．

筆者は 2023 年 8 月 26 日に文殊山石窟を参観する機会を得た．限られた時間であったため，マーロフ本 AYS との関連から，とくに重要と思われる第 168-1 号銘文の読みの確認に時間を充てた．その結果，伊斯拉菲尔・張 2012 で提出されたテキストを改訂することができた．本報告は，そのテキストと語注，およびマーロフ本 AYS の識語についての覚書きである．

２．文殊山石窟

文殊山石窟は，甘粛省粛南裕固族自治県祁豊鎮，酒泉市西南 15 ㎞の嘉峪山山中に位置する．前山区と後山区の両区域に分かれており，比較的規模の大きな石窟を形成していた．『重修粛州新志』によれば，かつては「三百禅室」あったと伝えられる．開鑿された時期は史書にみえないが，北朝期の中心柱窟，壁画が確認されている．また，1326 年，喃答失太子によって立てられ，前山区の聖寿寺に保存されていた漢文・ウイグル文合璧「重修文殊寺碑」によれば，「所観文殊聖寺古跡建立已経八百年矣」とあり，その創建が北魏時代に遡ることが知られる．現在はチベット仏教寺院の他，儒，仏，道の三教が混交した複数の寺院が活動しており，遺跡としての石窟寺院と並存している[6]．

３．テキストと訳注

伊斯拉菲尔・張 2012 で報告されたウイグル語銘文は全て前山区の第 1 窟，いわゆる万仏洞に書かれたものである（図 1）．万仏洞は，幅 5.7×奥行 5.8×高さ 3.71m の中心柱窟の構造をもつことから北朝時代に開窟され，西夏時代の

---

4 伊斯拉菲尔・張 2012．
5 伊斯拉菲尔・張 2012，94 頁．
6 姚 2019，2-3 頁．

壁画が残る（上生経変，西方浄土変など）[7].

報告によれば，ここに西夏語銘文 1 カ所，ウイグル文字モンゴル語銘文 1 カ所，ウイグル語銘文 10 カ所（14 条）が確認されている[8]．しかし写真からはチベット語，漢字銘文も確認できるようである．

伊斯拉菲尔・張 2012 は，デジタル写真から銘文を解読したと思われる．報告中の銘文に不規則な番号（第 159，163，168-1，168-2，170-2，171 号など）が与えられているのも写真番号に準じているからであろう．

本稿で検討する第 168-1 号銘文は東壁に描かれる上生経変の直下に位置している（図 2）．前述の理由から伊斯拉菲尔・張 2012 では 24 行で一つの銘文のように扱われているが，実際には 1〜6 行と 7〜24 行，書体も年代も異なる二つの銘文からなっている．マーロフ本 AYS と密接に関連するのは後者の部分であるが，以下に掲げるテキストでは，対照の利便を考慮して，伊斯拉菲尔・張 2012 のテキストに準じて 2 条の銘文を提示する．

凡例

[ ]　…　破損部分
( )　…　推補された語句
< >　…　右側に補足された語句
/////　…　判読できない残画
:　…　「˃」のように書かれた句読点もしくは埋め草．

第 168-1 号　ウイグル語銘文

01　wan li yg(rmi … yıl … ay-nıŋ)
02　iki yaŋı-sı biz bu(d)abali toyın
03　v(a)čir r(tna? toyın)///r’mysk’p upası
04　t’//[　] upası tardı
05　sayın bul(d)an upası ävlügi birlä
06　kälip yükündük
————————————————————（以下，別個の銘文）
07　ema ho qutluγ bolsun
08　biz k(a)plan toyïn qunčum toyın
09　bodi töküz upası：badum tärim <tämir baš oγul>-ta

7　姚 2019，5 頁．なお，壁画を西夏時代のものと考えることには疑義も提出されている（楊 2015 参照）．
8　伊斯拉菲尔・張 2012.

10 ulatı adın ažun-qa sanlıγ
11 bolmıš ögmüz baḍmi tarı-
12 nıŋ maŋalı söŋük-in
13 bo aranyadan taγ-ta
14 yäṭgürüp buyan ävirip <uṭlï ündürüp> yanduq
15 kinki-lärkä öṭüg bolzun
16 kälmiš anča kiši-lär v(ı)rs(ı)ŋ：
17 mäŋi iskäp toyın：
18 särinmäk toyın
19 bilgä taluy toyïn ıqbal u
20 toyïn solčum toyïn ratna v(a)čir
21 šabi töčük irsimšü šabi
22 v(a)čir küzätgü širmanri-ta
23 ulaṭï：bo kün-tin yaqru
24 ädgülük bolzun sadu

和訳

（1-6 行）

万暦二十…年…月二日上旬，我々，ブッダバラ道人，ヴァジュラ・（ラトナ道人？），…優婆夷，T’////優婆夷，タルドゥ・サユン・ブルダン優婆夷〔と〕その妻子とともに来て礼拝した．

————————————————————（以下，別個の銘文）

（7-23 行）

E MA HO！幸いあれ！われら，カプラン道人，クンチュム道人，ボーディ・トキュズ優婆夷，バドゥム・テリム，テミュル・バシュ・オグルらは，他の世界に属するものとなった（＝亡くなった）われらが母，バドミ・テリの吉祥なる舎利をこの阿蘭若の山に至らせて，福徳を廻向して果報をのぼらせて戻った．後人たちの記念となれ．〔一緒に〕来たのは以下の人々・仏僧である．メンギ・イスカップ道人，セリンメック道人，ビルゲ・タルイ道人，ウクバル道人，ソルチュム道人，ラトナ・ヴァジュラ沙弥，トチュク・イルシムシュ沙弥，ヴァジュラ・キュザトギュ沙弥尼らである．この日から近くに善あれかし．善哉．

語注

01) wan li: < Chin. 万暦．二十年代は西暦 1592〜1601 年にあたる．

02) bud(a)bali toyın: < Skt. buddhabala. あるいは bud(a)pali < Skt. buddhapāla の可能性も排除できない．toyın < Chin. 道人．仏教僧侶を指す．ただし，マーロフ本 AYS では，同一人物が，toyın と šabi（具足戒を受けていない見習い僧）を時系列に関係なく混用されている（šabi よりも先に toyın を称している場合もある）．これは書写人の誤った記憶に起因するものかもしれない．

07) ema ho:< Tib. e ma ho. 伊斯拉菲尔・張 2012, p.98 は，六字真言「唵嘛呢叭咪吽」の簡称とするが，ここは文章の一節に特別な重みを与え，強調するために文章の冒頭に使われる憐憫，驚嘆を示す感嘆詞とみるのに従いたい（Zieme 1991, p. 283）．伊斯拉菲尔・張 2012 に言及はないが，とくに注目したいのは，この感嘆詞がマーロフ本 AYS の巻第 5 と巻第 8 において，章番号と葉番号を示す帖付けにも書写されている点である．例えば次のようである．emaho sekizinč ülüš on「emaho 第 8 章 10（葉）」[9]．しかも，同じく e ma ho を帖付けに使用している巻第 5 の識語には，イスタブリ道人（istavri toyın），スヴァスティ道人（suvasti toyın），ビルゲ・タルイ道人（bilgä taluy toyın）の 3 人の持戒者？（caqšapat maŋal）によって書写されたことが記されているが，このうちの一人，ビルゲ・タルイ道人の名は，第 168-1 号銘文にも確認される．また巡礼の同行人であるラトナ・ヴァジュラの名もマーロフ本書写の発願者として確認されるところである．伊斯拉菲尔・張 2012 は，銘文と写本にみえるビルゲ・タルイ道人を同一人物とみることに慎重であるが，人名，時期，書写伝統（e ma ho）の一致から，同一人物とみて差し支えない．

08) k(a)plan toyïn qunčum toyın: 伊斯拉菲尔・張 2012 は qavčum と読む．順治 15 年（1658）の紀年をもつ第 172 号銘文の 4 行目に käpälin toyın qunčuy šabi とある二人もこれと同一人物である可能性が高い．

13) aranyadan taγ-ta: 伊斯拉菲尔・張 2012 は arıγtn taγ-tın と読む．aranyadan < Toch. B āraṇyātan ~araṇyatan < Skt. āraṇyāyatana「坐禅処，僧院」．楡林窟のウイグル語銘文では taγ aranyadan と，本銘文とは逆の語順で在証される（松井 2017，19 頁）．

16) v(ı)rs(ı)ŋ: 伊斯拉菲尔・張 2012 はこの語を欠落する．v(ı)r は「仏」の漢字音（庄垣内 2003, 133），s(ı)ŋ は「僧」の漢字音（庄垣内 2003, 134 頁）である．これで「仏僧」すなわち出家僧侶を指す．銘文中で人名の後に toyın「道人」が付される人物がこれにあたる．

---

9 Kaya 1994, p.280.

19—20) ıqbal u toyın: u は toyın と書くべきところを upası と誤って書こうとしたことに気づき止めたのかもしれない．ıqbal は，ペルシア語 iqbāl「前進」に由来するムスリム人名．楡林窟の銘文にも在証例がある（松井 2017, No. 105）．筆者は，今回の参観において後山千仏洞（第10窟）にも同一人名を確認した．

20-21) ratna v(a)čir šabi: ratna včir < Skt. ratnavajra. 伊斯拉菲尔・張 2012 は，テキストと翻訳では ratna v(i)čay と読むも，語註では ratna v(a)čir とする．Ratnavčir は，マーロフ本 AYS 巻第 1，3，4，5，7 の識語にも施主（bušı idisi）の一人として名を連ねている．おそらく同一人物であろう．

22) v(a)čir küzätgü: 伊斯拉菲尔・張 2012 は，v(i)čay közätü と読む．

23) bo kün-tin: 伊斯拉菲尔・張 2012 は，bo buyan-tın と読む．

４．マーロフ本 AYS 識語との関係

文殊山石窟のウイグル語銘文は，壁画が描かれた時に付帯して書かれたものではなく，後代の巡礼者が書き残した記念（ötig）である[10]．万仏洞第 168-1 号銘文を検討した結果，巡礼同行者として名を連ねるラトナ・ヴァジュラ沙弥 Ratnav(a)čir šabi とビルゲ・タルイ・道人 Bilgä Taluy Toyın が，マーロフ本 AYS の識語に記載される人物と同一人物である可能性が高いことを確認した．

ここではまず，両人の名が現れるマーロフ本 AYS の識語から，両人の関係性を確認しておきたい．

マーロフ本 AYS 巻第 5 の識語[11]

y(e)mä bušï idisi süzök köŋüllüg ratnavačir ıqıaŋsman ikägünüŋ kertügünčiŋä: altun yaruq öŋlüg y(a)ruqluγ nom ärdinig ötünmäk üzä erinč č(a)hšap(a)t maŋal toyın bešinč aynıŋ y(e)g(i)rmi ikisi : ki toŋuz : či tegmä tutmaq kün qamaγ pınsun tınl(ı)γlar asıγıŋa yaγızıŋa enär kün üzä toŋkuvan balıqda ratnav(a)čirnıŋ evintä biz č(a)hšap(a)ṭmaŋal ısdavrı toyın : svastı toyın : bilgätaluy toyın üčägü bašlayu bitidük : yänä altınč aynıŋ altı yaŋısı šim sıčγan y(e)mä či tegmä tutmaq kün üzä y(e)mä ısdavri toyın bešinč küin nomug bitiyü tolu qıltım: ädgü ::

---

10 Matsui 2023, p. 177.

11 Kasai 2008, p.28.

また，施主，清き心もてるラトナ・ヴァジュラ（Skt. ratnavajra）とウクゥアンスマン（Tib. rkyaṅ-sman）の二人の信心により，『金光明経』を請願によって，賤しき持戒者道人が，5 月 22 日，己亥の執といわれる“執る”日，衆生のため諸尊（pınsun < Chin. 本尊）が大地に降臨し給う日に，東関の城のラトナ・ヴァジュラの家にて，我ら持戒者，ウスダヴリ道人，スヴァスティ道人，ビルゲ・タルイ道人の三人がはじめに書写した．そして 6 月 6 日，壬子のまた執といわれる“執る”日に，またウスダヴリ道人が第五巻の経典を書写し終えた．善哉．

マーロフ本 AYS 巻第 3 の識語[12]

tay čiŋ kuo kaŋ si y(e)g(i)rmi altınč otčuq-taqı oot qutluγ tavıšγan yıl kuu yi hua vihar-qa tayaqlıγ bilgä taluy šabi: ratna v(a)čir-nıŋ öṭükiŋä toŋkuvan suzaq-ınta onunč ay y(e)g(i)rmi törti qutluγ kün üzä bitiyü tolu boltı :: kenki tözünlärkä otüg bolzun sadu ::

大清国康熙 26 年，燃える火の元素の卯の年，帰華寺によれるビルゲ・タルイ沙弥は，ラトナ・ヴァジュラ沙弥の請願により，東関の村にて 10 月 24 日の幸いある日に書写し終えた．後の聖者たちに記念となりますように．善哉．

これらの識語によれば，ラトナ・ヴァジュラ沙弥が施主として AYS の書写を発願し，ビルゲ・タルイ道人が書写人の一人として参加していたことがわかる．発願の目的は，亡き父母の往生浄土のためであることが「廻向文」に記されている[13]．

護 1997 によれば，マーロフ本 AYS の書写は，巻数順に行われたわけではない．紀年が確認できるものを列挙すれば，巻第 5（康熙 26 年 6 月 6 日），巻第 6（6 月 22 日），巻第 7（6 月 24 日），巻第 4（8 月 15 日），巻第 1（10 月 24 日），巻第 3（10 月 28 日），そして最後に書写された廻向文（buyan ävirmäk）は，康熙 27 年 10 月 30 日となっている[14]．書写を終えた写本が，

---

12 Kasai 2008, pp.88-89.

13 「この金光明経を写させた加持力によって，先に亡くなった父母が極楽に生まれますように」bititmiš bo altun y(a)ruq nom ärdini-niŋ aḍišṭit küčintä : burun ärtmiš ög qaŋ-larım tuγzun sukavati-ta. Kasai 2008, p. 106.

14 廻向文は，Tekin 1966 によってはじめて発表された．Kasai 2008, pp.101-110 も参

一巻完成するごとに文殊山の某寺に奉納されたのか，それとも全体が完成してまとめて奉納されたのかはわからない．少なくとも万仏洞のウイグル語銘文に奉納に関わるものはみつかっていない．

書写が行われた場所は，濱田正美が明らかにしたように，粛州城の東側に付設して増築された東関（もしくは東関廂）にあった帰華寺（Kuu yi hua vihar）においてであった[15]．『重修粛州新志』によると，帰華寺は「哈密衛の浄脩国師必牙剌失力の娃子，拝言卜剌が建てたものである．拝言卜剌の父は哈密にあって居住していたが，成化の間（1465-87）にトゥルファンの王子速瓦亦思（及び）速檀阿力の搶掠を被り，（哈密に）存し難く，正徳（1506-21）の初，部落を率いて粛州に投順したので，その進貢を准した．現在都督の乩吉卜と拝言卜剌が新旧の哈剌灰二種及び畏兀児一種の夷人を管束している．その故に関廂に於いて寺を建て，帰華寺と言っている」とされるところである[16]．当時，粛州城の東関は，外国の使節団や商人など，各種の外国人が宿泊していた．なかには居を定めて進貢の拠点とするものもいた．榎一雄は，そのような中国内地である粛州に住みついた外国人たちの姿を「寄住」「寄居」をキーワードに炙り出した[17]．一例を挙げると，「万暦四年二月乙酉（1576 年 3 月 31 日），粛州衛東関廂寄住罕東左衛都督同知阿束把力幷随員正副使虎都帖木児等入貢，賞給如例」（『明神宗実録』巻四七）とある．これは，罕東左衛都督同知等が粛州城東関廂に寄住し，入貢している例である．

AYS を書写奉納し，文殊山巡礼を行っていたウイグル人たちもそのような移住した仏教徒であったと思われる．先に紹介したマーロフ本 AYS 巻第 3 の識語には次のような表現があった．「帰華寺によれるところのビルゲ・タルイ沙弥 kuu yi hua vihar-qa tayaqlıγ bilgä taluy šabi」．下線部「よれるところの」は tayaqlıγ を翻訳したものである．この語はウイグル語仏典では「依」を翻訳するのに使用されることが多いが，この場合は「寄住」，「寄居」の透写語の可能性がある．このことと『重修粛州新志』「帰華寺」の記事と考え合わせるならば，粛州東関の帰華寺には，哈密から寄住したウイグル人仏教徒のコミュニティーが存在し，彼らが様々な仏事を行っていた様子が想像されるのである．

照せよ．

15 濱田 1983．

16 訳文は濱田 1983 に依る．榎 1979, 163-164 頁も参照せよ．

17 榎 1979．

５．今後の課題

文殊山石窟万仏洞第 168-1 号銘文の解読を通じて，マーロフ本 AYS との関係やその背景について思いつくところを書き連ねてみた．今回確認できたのは 14 条ある銘文のうち 2 条のみであるが，それでもウイグル仏教史にとっていくつかの重要な視座を得ることができた．残る銘文についても伊斯拉菲尔・張 2012 を手がかりに，現地調査に基づいた読み直しが求められよう．

なお，今回の参観では後山千仏洞（第 10 窟）の中心柱の基台部分にもウイグル語銘文 4 カ所の存在を確認することができた．これらもウイグル仏教最晩期の姿を垣間見せる貴重な資料となることが期待される[18]．

参考文献（著者名ＡＢＣ順）

榎一雄 Enoki Kazuo
1974 「明末の粛州」，『宇野哲人先生白寿祝賀記念　東洋学論叢』東方学会（『シルクロードの歴史から』研文出版，1979 年，151-170 頁に再録）．

濱田正美 Hamada Masami
1983 「粛州城東関帰華寺―マーロフ本ウイグル訳金光明最勝王経奥書注釈一則―」，小野和子（編）『明清時代の政治と社会』，京都大学人文科学研究所，701-706 頁．

伊斯拉菲尔・玉素甫，張宝璽 Israpil Yusup and Zhang Baoxi
2012 「文殊山万佛洞回鶻文題記」，敦煌吐魯番学研究院（編）『語言背後的歴史 西域古典語言学高峰論壇論文集』上海古籍出版社，94-106 頁．

笠井幸代 Kasai Yukiyo
2008 *Die uigurischen buddhistischen Kolophone*. Berliner Turfantexte XXVI. Brepols, Turnhout.

Kaya, Ceval
1994 *Uygurca Altun Yaruk. Giriş, Metin ve Dizin*. Atatürk Kültür, Dil ve Tarih Yüksek Kurumu. Turk Dil Kurumu Yayınları : 607, Ankara.

松井太 Matsui Dai
2017 「敦煌石窟ウイグル語・モンゴル語題記銘文集成」，松井太・荒川慎太郎（編）『敦煌石窟多言語資料集成』東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所．

---

[18] 2023 年 8 月に蘭州大学で挙行されたシンポジウム「伝承与創新：中国敦煌吐魯番学会成立四十周年国際学術検討会」において，依明・吐送江氏と陳泳君氏によって「文殊山石窟回鶻文題記解読―兼論清朝時期河西的回鶻仏教団体」と題する報告が行われたようである．残念ながら筆者は拝聴する機会を得なかった．報告が出版されることを鶴首したい．

2023 Old Uyghur Graffiti Inscriptions from Central Asia. In: O. Škrabal et al. (eds.), *Graffiti Scratched, Scrawled, Sprayed*. Berlin/Boston, pp. 173-214.

護雅夫 Mori Masao
1997 「ウイグル語訳金光明最勝王経」『古代トルコ民族史研究』山川出版社，545－576 頁.

Radlov, V.V., Malov, S.E.
1913 *Suvarṇaprabhāsa (sutra zolotogo bleska), Tekst ujgurskoj redakcii*, Sanktpeterburg, Bibliotheca Buddhica XVII.

Tekin, Şinas
1966 Buyan evirmäk. In : *Reşid Rahmeti Arat için*. Ankara.

楊富学 Yang Fuxue
2015 「文殊山万仏洞西夏説献疑」，『西夏研究』2015 年第 1 期.

姚桂蘭（主編） Yao guilan (ed.)
2019 『文殊山石窟』甘粛人民美術出版社.

ツィーメ，ペーター・百濟康義 Zieme, Peter and Kudara Kogi
1986 『ウイグル語の觀無量壽經』永田文昌堂，京都.

Zieme, Peter
1991 *Die Stabreimtexte der Uiguren von Turfan und Dunhuang. Studien zur alttürkischen Dichtung*. Akademiai Kiado, Budapest.

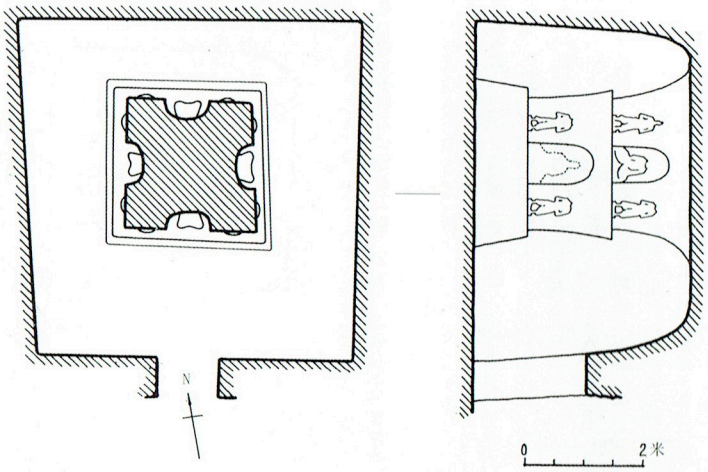


図１　文殊山前山万仏洞平面図（姚 2019 より転載）

図２（伊斯拉菲尔・張 2012 より転載）

米国所蔵の絹本画の基底材について

田 林　啓

はじめに

絵画研究の手法の一つに，基底材（絹や紙，麻などの支持体）の分析がある．日本の仏画研究では，その蓄積があり，中国絵画方面でも近年熱心に取り組まれており[1]，絵画の質や時代を特定するための指標としてそのデータが活用されている．しかし，敦煌画については，まとまった研究としては，田先千春氏の画絹に関する成果をあげ得るに過ぎない[2]．田先氏の研究は，調査対象をベルリン，ロンドン，ニューデリー，パリに所在の敦煌・トルファン絵画の一部とし，ロデリック・ウィットフィールド氏の観察に基づいて，一筬目に二本の経糸を通す諸経の画絹（挿図 1）と，そうではなく目の細かい経緯糸均質の絹と分けて考察しており[3]，極めて有用な成果である．諸経は，日本の仏画や中国の書画に一般的に用いられる絹で，敦煌画でも中国的仏画（典型的な敦煌様式を示す作品）には基本的にこの絹が用いられ，西方式の作品（コータン・チベット系の菩薩像幡）あるいは一部の中国的仏画にはもう一方の均質な絹が用いられるようである．確かに典型的な敦煌画の一例である日本の白鶴美術館所蔵の天成四年（929）銘「薬師如来図」にも諸経が用いられている（画面向かって下方の整った画絹で，1cm 四方あたり経糸 54 本，緯糸 28 越）[4]．一方，均質な絹を使う中国的敦煌仏画の例には，田先氏分析では四点見出され，大英博物館所蔵の「地蔵菩薩図」（ch.lviii.003，建隆四年〈963〉）と「観音菩薩図」（ch.lvii.004，太平興国八年〈983〉）の 10 世紀後半の紀年のある作品が挙げられ，他二点も同じく 10 世紀末作と推測されている[5]．そのため，均質な絹

1　泉武夫『古代中世絵絹集成―基底材の美術史』中央公論美術出版，2022 年，竹浪遠，杉本欣久「黒川古文化研究所所蔵の日本・中国絵画の画絹について」『古文化研究』第 8 号，2009 年，86〜115 頁．

2　田先千春『トゥルファン・敦煌の仏教絵画の基底材について―西ウイグル王国における棉織物の研究の一環として』（富士ゼロックス小林節太郎記念基金小林フェローシップ 2009 年度研究助成論文）．

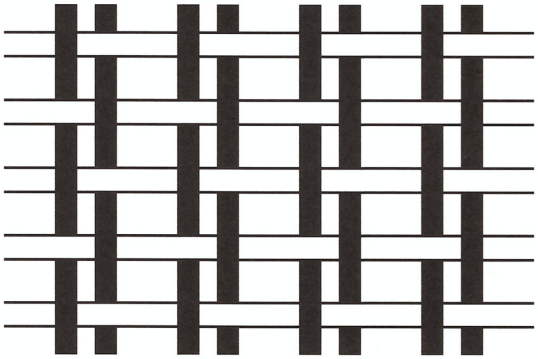
3　前掲田先（2009）4〜11 頁．

4　拙稿「五代・薬師如来画像」『國華』第 1541 号，2024 年，46 頁．

5　前掲田先（2009）表 4.

が非西方式絵画以外で用いられることには，10 世紀後半という時代性が反映されている可能性がある．米国所蔵の敦煌画の自然科学的分析の成果には，マシュー・ブラック氏の詳細な研究がある[6]が，氏は顔料分析に比較的重きを置いて分析しており，基底材に関しては，目立った結果のみを記載している．

以下では，今後の敦煌画の基底材分析の一材料となるべく，筆者が実見し得た米国の絹本著色掛幅の基底材の観察結果を示す．



挿図 1　画絹の構造

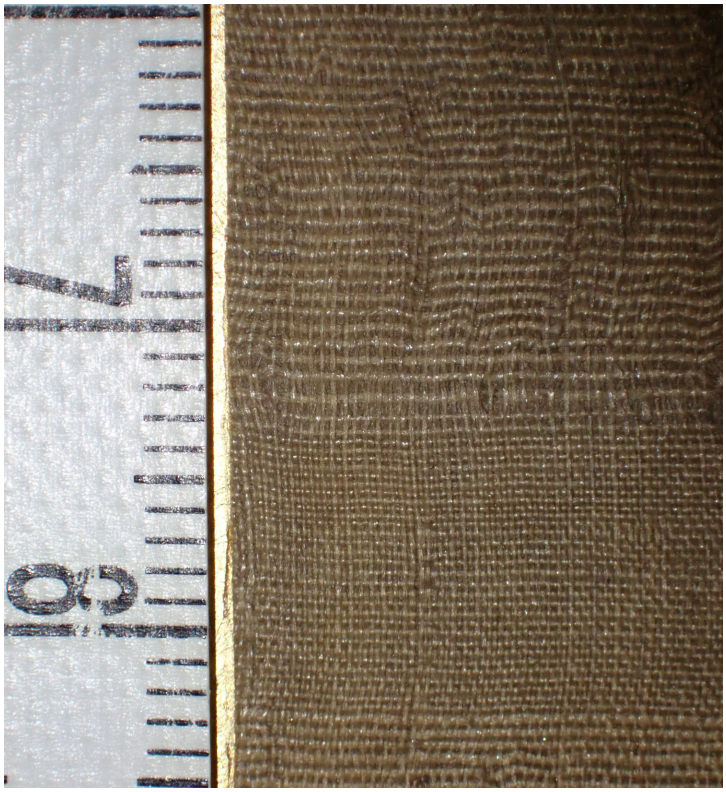
一，フリーア美術館所蔵「水月観音菩薩図」（挿図 2，F1930.36，乾徳六年〈968〉）

10 世紀当時敦煌を統治していた曹氏一族の曹延□とその母・李氏，嫁の陰氏，娘の宗花を供養者像として描く[7]．基底材の絹（挿図 3）は，中尊に向かって左端の箇所（大円光横の色彩のない部分）で，1cm 四方あたり，経糸 51 本，緯糸 22〜30 越から成る．王族発注の作品であるが，先述の白鶴美術館所蔵の庶民発注品と絹の詰まり具合は大差ない．ただし，その組織は，目が細か

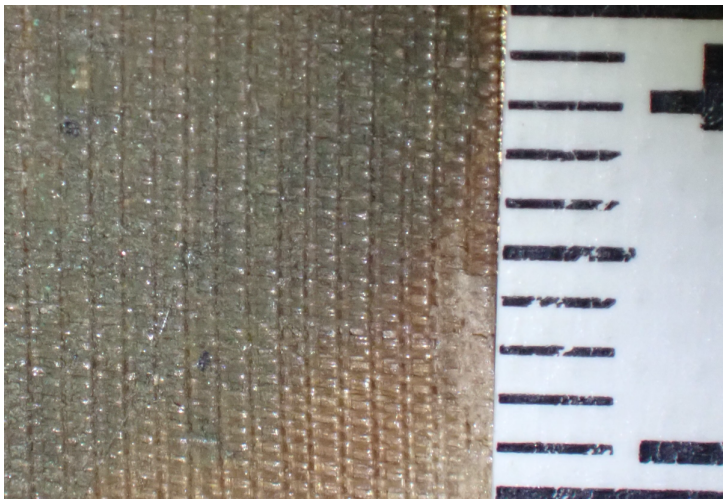
6 Matthew Brack, “A Technical Study of Portable Tenth-Century Paintings From Dunhuang in US Collections”, Straus Center for Conservation and Technical Studies, Unpublished, 2010.

7 供養者については，次の論文参照．以下同じ．坂尻彰宏・田林啓「米国フリーア美術館蔵水月観音菩薩図再考」『敦煌写本研究年報』第 18 号，2024 年，田林啓・坂尻彰宏「米国所蔵敦煌絹本着色画三題の位置づけ」『大阪市立美術館　紀要』第 24 号，2024 年．

挿図２　水月観音菩薩図　乾徳六年（968）　フリーア美術館所蔵



挿図３　画絹　水月観音菩薩図



挿図４　画絹　被帽地蔵菩薩図

く，経糸が一本ずつ均等に通される平織に近く，諸経とは様子が異なる．緯糸の方が太い箇所もあるが，10 世紀後半の絵画として，均質な経緯糸を用いる絹の類に位置付けられる．また，フリーア美術館には，もう一点の絹画作品「被帽地蔵菩薩図」（F1935.11）が所蔵される[8]．当画は，図像，様式いずれにおいても検討が要される．その絹（挿図 4）は，諸経ではあるが，ムラがなく，一定の間隔を正確にあけて整った織りが為されており，絹もよく練られて白さが目立つため，中国絵画との比較では，清朝以降の絹[9]と類似する．

二，ボストン美術館所蔵「六臂観音菩薩図」（挿図 5，27.570，開宝八年〈975〉）

敦煌十七大寺の一つである霊修寺の戒浄と明戒の二尼僧が発願者となって制作された．一見して 10 世紀の敦煌画らしい様式を具えており，中尊や善悪童子の図像，周囲の諸難救済の図様も，時代に反せず，目立った特徴を見せないかのようである．しかし，基底材は，極めて特殊で，菱文を織り出す綾絹である（挿図 6）．各菱文は，四つセットで四菱文も形成する．マシュー・ブラック氏は，当基底材を袈裟などの布が再利用されたものの一つと位置づけている[10]．このような本来，画絹として作られていない絹が用いられる敦煌画には，管見では夾纈染の絹を利用した幡画「持杖薬師如来立像」（ギメ美術館所蔵，EO.1178）[11]や花綱のような文様が織られる幡頭「如来坐像」（V&A 美術館所蔵，STEIN490）[12]があり，現存例は限られている．

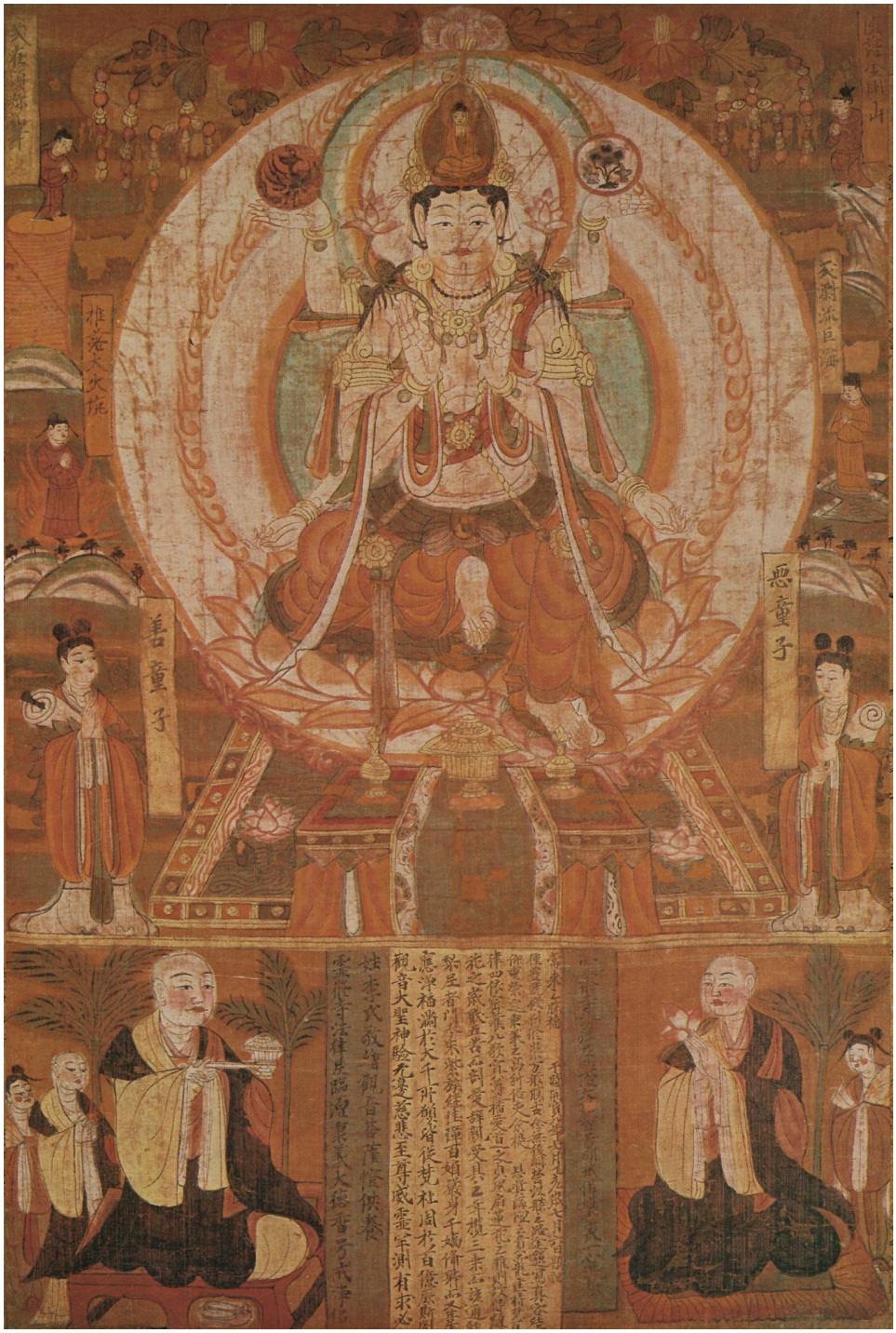
8　https://www.si.edu/object/ksitigarbha-bodhisattva-nan-wu-di-cang-pu-sa-xiang:fsg_F1935.11，閲覧日：2024 年 1 月 25 日．

9　前掲竹浪・杉本（2009）112 頁参照．

10　BRACK, Matthew（2010）pp. 32-34.

11　ジャック・ジエス編『西域美術―ギメ美術館　ペリオ・コレクション』第 1 巻，講談社，1994 年，図版 12.

12　https://collections.vam.ac.uk/item/O89938/the-stein-collection-banner-fragment-unknown/，閲覧日：2024 年 1 月 25 日．



挿図５　六臂観音菩薩　開宝八年（975）　ボストン美術館所蔵

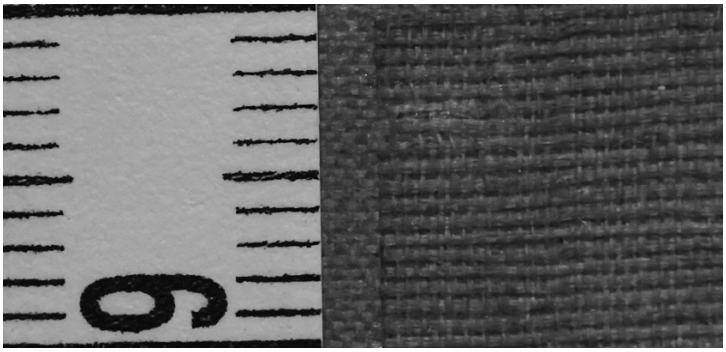
挿図 6　綾絹　六臂観音菩

三，ハーバード大学美術館所蔵「十二面観音菩薩図」（挿図 7，1943.57.14，雍熙二年〈985〉）

本画もフリーア美術館の水月観音図と同様に，曹氏一族の注文によって制作された．すなわち，第七代節度使として敦煌を統治することとなる曹宗寿の発願による．発色が良く，描線も総じて丁寧になされる本画であるが，その画絹（挿図 8）についても特筆すべきものである．諸経の画絹であるが，白鶴美術館の薬師図のそれと比べると，緯糸が太く，詰まっており，空隙が少ない．供養者枠の向かって左端部分において，1cm 四方に経糸 38 本，緯糸 19 越から構成される．マシュー・ブラック氏の ^{14}C 測定によると，この画絹の製作年代は，発願文の年紀よりも少なくとも 180 年程遡る唐代・637〜807 年頃[13]に当たり，本画には古絹が敢えて用いられたと判断される．

[13] BRACK, Matthew（2010）p. 38.

挿図７　十二面観音菩薩図　雍熙二年（985）　ハーバード大学美術館所蔵



挿図 8　画絹　十二面観音菩薩

おわりに

以上，極めて簡略ではあるが，米国所蔵の敦煌画の基底材についての観察結果を示した．平織に近い絹，綾絹，そして古絹と，いずれも一般的な 10 世紀の諸経の画絹とは異なっていた．これらは，10 世紀後半の敦煌における基底材の種類の広がりや注文制作におけるその選択の幅を考察するために重要な資料である．また，時代判定の有力な材料としての基底材の重要性にも改めて気づかされ，一部の作品に後世の画絹の性質が見出されることも注意される．

【挿図の出典】

挿図 1：泉武夫『古代中世絵絹集成―基底材の美術史』中央公論美術出版，2022 年，5 頁．

挿図 2：Thomas Lawton, *Freer Gallery of Art Fiftieth Anniversary Exhibition II. Chinese Figure Painting*, Washington, DC: Smithsonian Institution, 1973, fig. 16.

挿図 3，4，6，8：筆者撮影．

挿図 5：『ボストン美術館展』図録，国立西洋美術館，1978 年，図版 74．

挿図 7：Keiatin A. Mortimer, *Harvard University Art Museums: A Guide to the Collections*, New York: Abbeville Press, 1986, Fig.24.

西夏時代の河西回廊西部～中部における石窟寺院について

―― その分布と西夏による支配との関連性の考察を中心に ――

佐 藤　貴 保

1．はじめに

西夏王国が仏教を国家主導で信仰し，各地に仏教寺院遺跡や仏典が多数発見されていることは周知のとおりである．筆者は 2008 年以来，甘粛省敦煌市や粛北蒙古族自治県，瓜州県（以下，玉門市を含め，これらの地域を河西回廊西部と呼ぶ）に所在する西夏時代に新造もしくは重修されたと考えられている石窟寺院―莫高窟，五个廟石窟，榆林窟，東千仏洞―を訪れ，壁面に描かれた供養人像の服装や傍題の墨書を読み取り，現地付近のオアシスにいる官僚の一族によって新造・重修された石窟もあることを明らかにしてきた[1]．

石窟寺院はいずれもオアシスの水源となっている河川の上流の山地に造営されており，その新造ないしは重修に西夏の現地の官僚が関わっていたということは，西夏の支配が少なくとも石窟の所在する河川の上流域まで及んでいたことを示唆している．西夏の河西回廊支配の端緒は 1028 年の甘州（張掖）占拠とされるが，西部の瓜州や敦煌オアシスまで掌握するのは 1070 年代以降とされており，その実効支配がオアシスの背後（南側）にある山地のどのあたりまで及んでいたのかを検証するうえで，石窟の新造・重修の時期に関わるデータの収集は有益であると筆者は考える．

そこで本科研では，河西回廊西部の玉門市や，中部（酒泉市・張掖市・粛南裕固族自治県）の石窟寺院にまで調査対象を広げ，西夏時代に新造・重修された石窟がどのくらいあるのか，どのような場所に立地しているのかを実地調査で確認し，西部～中部における西夏の支配が山地のどのあたりまで及んでいたのかを考察することを計画段階では企図した．しかしながら，いわゆるコロナ禍の影響で長らく中国への渡航が困難であったため，先行研究で西夏時代のものと指摘されている寺院（石窟以外のものも含む）の情報を収集する作

1　佐藤 2010; 佐藤 2017; 佐藤 2019; 佐藤 2020 参照．

業を中心に行った[2]．そして 2023 年 8 月にようやく中国への渡航調査が実現し，これまで調査を行ってきた莫高窟，五个廟石窟，榆林窟に加え，西夏時代にも使用されたとされる瓜州県鎖陽城鎮の塔児寺遺跡，西夏時代の重修窟があるとされている玉門市昌馬郷の昌馬石窟，そして粛南裕固族自治県祁豊蔵族自治郷の文殊山石窟を，いずれも短時間とはいえ調査することがかない，調査時間が限られていたため調査は精緻なものとは言い難いものとはなったものの，文殊山石窟では先行研究が指摘する通り，西夏文の題記や供養人像を確認できた．

本稿ではまず，文殊山石窟での調査結果を報告し，塔児寺遺跡と昌馬石窟での調査も踏まえ，河西回廊西部～中部の石窟群から想定される西夏による当該地域における支配の状況を考察していきたい．

2．文殊山石窟前山万仏洞の供養人像と西夏文墨書

2023 年の調査では，文殊山前山万仏洞で西夏文の墨書や供養人像が確認できた．いずれも先行研究がそれらの存在をすでに指摘しており，カラー写真が公刊されている[3]が，写真では西夏文の墨書の有無を判別することは困難である．また，管見の限りにおいて，墨書の録文は未公表である．

公刊済みの写真では，南壁下部に少なくとも 9 身の供養人像が描かれている．ここでは壁面に向かって最も右に描かれている像を第 1 身，最も左に描かれている像を第 9 身とし，右から順に番号を振ることにする．壁面の中央に，蓮台とその上に赤色の正方形枠（傍題と思われるが，後代に書かれたと思われるチベット文に覆われ，読めない）が描かれ，これを挟んで右側に左向きに 2 身（第 1 身，第 2 身），左側に 7 身（第 3～9 身）描かれている[4]．第 2 身と第 3 身は坐像，それ以外は合掌した立像である．

第 2 身は供養人像の中で最も大きなスケールで描かれている．白い衣の上に赤い袈裟をまとい，山形の冠を被り，方形状の敷物に座っている．先行研究が既に指摘している通り，山形の冠は榆林窟第 29 窟主室南壁東側の男性供養人像群の上部に描かれる僧侶「真義国師鮮卑智海[5]」像が被る冠と酷似してい

---

2 李春元 2008; 敦煌研究院・甘粛省文物局 2011; 国家文物局 2011b を基にデータの収集を行った．

3 姚 2019, pp. 94-99 参照．

4 第 4 身と第 5 身，第 8 身の顔は左向きだが，それぞれ左隣の人物像と会話している様子で描かれており，体幹は右を向いている．

5 題記は西夏文で書かれている．漢訳は荒川 2017,p.311,TY123[Y29 Tang01]に基づく．

る[6]．榆林窟の「真義国師鮮卑智海」像のように高い須弥座には座っていないが，文殊山前山万仏洞に描かれたこの僧侶は，冠の形状から西夏時代の国師レベルの高僧である可能性が高い．この像の左に赤い傍題があり，漢文で

甘州府路指揮僉事許忠
到此
□□□年六月　日

と墨書されているが，傍題に書かれる内容としてはふさわしくなく，後代に加筆されたものであろう．漢文の 2 行目「到此」のすぐ下に，うっすらと西夏文字の「𗍫」の旁の部分のような墨書の残画が見えた．

第 3 身は，蓮台を挟んで左側に第 2 身と向かい合う形で描かれる剃髪の僧である．第 2 身と同じスケールで描かれており，冠を被らず白い内衣の上に赤い衣（襟や袖口は青色）をまとい，第 2 身と同じような方形の敷物に座っている．手を広げ，第 2 身の僧と会話しているようにも見える．前述の榆林窟第 29 窟主室南壁では，通路を挟んで右側に女性供養人像群が描かれているが[7]，「真義国師鮮卑智海」像と同じスケールで赤い袈裟と赤い内衣を着て座った尼僧が描かれており，榆林窟第 29 窟との類似性が認められる．第 3 身の頭部の右横には赤い傍題が描かれ，少なくとも左右 2 列に墨書が視認できる右列は漢字で「甘州府弟子」と書かれ，その下は双行で漢字が書かれるが，判読できなかった．左列は 11 字くらいの西夏文が書かれている．判読は難しく，ぼんやりと

□□□□□□□𘔀𘓐𘓐□

のように見えた．『夏漢字典』（李範文 2008）を参照すると，𘔀は「教習する」の意味[8]，𘓐は「時々，或いは」の意味[9]，𘓐は「明後日」や漢語「謝，仙」等の音写[10]，あるいは鳥の名称に使われるとされているが[11]，全体として文意が通じず，再度実見調査による判読作業を要する．

6　敦煌研究院 1990, pl. 117; 姚 2019, p. 94, pl. 1-117; 李甜 2022, pp. 318-319 参照．
7　敦煌研究院 1990, pl. 120 に一部の写真が掲載されている．なお，佐藤 2020, pp. 32-37 で，女性供養人像の服装などの特徴を解説している．
8　李範文 2008, p. 187, no. 1118 参照．
9　李範文 2008, p. 432, no. 2630 参照．
10　李範文 2008, p. 595, no. 3683 参照．
11　李範文 2008, p. 595, no. 3684 参照．

立像のうち，第 1 身は剃髪し，赤い服を着ている．頭部の左横に赤い長方形の傍題があるが，字は読み取れない．

第 4 身は，第 3 身より 1 頭身ほど低い高さで描かれている．剃髪し，赤色の内衣の上に赤色の袈裟をまとった僧である．第 4 身の視線は第 5 身と第 6 身の描かれている左下の方を向いている．頭部右上に赤い長方形の傍題があり（第 3 身の傍題より小さい)，「信女」という漢文が読み取れた．

第 5 身と第 6 身は，他の供養人像よりもかなり小さく描かれていて，子どもとみられる．いずれも赤い衣を着ている．第 5 身と第 6 身の傍題は書かれていない．

第 7 身は，第 4 身と同じ高さで描かれている．赤色の袖口の狭い袍を着て，内側下部に白いスカートを履き，白くとがった靴を履いている．頭部は判然としない．頭部右上に赤い長方形の傍題があるが（第 4 身の傍題よりさらに小さい)，ウイグル文の墨書に覆われて判読できない．

第 8 身と第 9 身は，第 7 身よりも 1 頭身ほど低い高さで，かつ少し小さなスケールで描かれている．どちらも第 7 身と同じ服装と履物をした女性像であり，頭部は髪を結っているようにも，冠（ただし，楡林窟第 29 窟の女性供養人像の冠のような形式には見えない）を被っているようにも見える．それぞれの頭部の上方に赤い長方形の傍題（第 7 身の傍題よりさらに小さい）があるが，字は判読できない．

第 2 身の僧の冠の形状，西夏文の墨書が確認できることから，この供養人像群が西夏時代に描かれたものである可能性はかなり高いとみられる．楡林窟第 29 窟の供養人像と似ているところがあるとはいえ，題記がほとんど判読できず，官人の服装をした者が確認できないため，この壁画がどのような人物の発願によって描かれたのかはわからないが，子どもの供養人像が描かれていることを考慮すると，特定の一族が関係していたのではないかと推測される．

3．西夏時代の新造・重修石窟の分布状況

前節で述べた通り，文殊山石窟前山万仏洞の供養人像は，西夏時代に描かれたものである可能性が高いとみられる．文殊山石窟前山千仏洞も西夏時代の重修とされている．先行研究によると，前山千仏洞の中心柱北壁下部に供養人像が二身向かい合って描かれていて，左側に円領衣を着て，腰に帯を締め，香炉を持った供養人像，右側に交領衣を着て，腰に帯を締め手に花を持った供養

人像が描かれており，西夏時代に描かれたものという[12]．今回の訪問では時間的な制約から充分な調査はできなかったが，頭部の不鮮明な赤や緑の服と白いスカートを履いた供養人像を三身確認した．各像の，壁面に向かって右横上部に赤い長方形の傍題があるが，字の判読には至らなかった．文殊山石窟は酒泉オアシスを潤す北大河（かつては黒河と合流してカラホト遺跡がある内蒙古自治区エチナ旗まで流れていた）の支流祁豊河（洪水河）の上流に所在している．先行研究の成果や筆者による実見調査の結果，西夏の支配が文殊山石窟の所在する地域にも及んでいた可能性が高いと言える．

今回の調査で初めて訪問した玉門市昌馬郷の昌馬石窟も，先行研究では西夏時代に重修したものがあると指摘されている[13]．筆者は第 2 窟で楡林窟と類似した色調の壁画を実見しており，ここにも西夏の支配が及んでいた可能性がある．昌馬石窟は，玉門市を流れる疏勒河の上流にあたり，現在の玉門市街がある地域から一つ峠を越えてさらに南の谷の崖に造営されている．西夏時代における昌馬石窟を含む玉門地域の状況については，文字記録が一切残されておらず，どのあたりにオアシスが形成されていたのかはわからない．西夏では都の中興府（寧夏回族自治区銀川市）との周辺以外の地域は監軍司の管轄下に置かれる．昌馬石窟のある地域は粛州監軍司か瓜州監軍司の管轄下に置かれていたものと推測される．唐代の瓜州城が鎖陽城遺跡に比定され，その遺跡に隣接する塔児寺遺跡が唐〜西夏時代のものとされていることから，西夏時代の瓜州監軍司の治所も鎖陽城に置かれていた可能性が高い．さすれば，昌馬石窟が所在する地域は粛州監軍司の治所（酒泉市粛州区と推定される）よりも距離的に近い瓜州監軍司の管轄地域に属していたと推定するのが妥当であろう．

瓜州県の楡林窟や東千仏洞が西夏時代に新造・重修されたものであることは，題記や供養人像が実在することから，もはや疑いはないだろう．これらの石窟も瓜州監軍司の治所が所在していたであろう鎖陽城遺跡[14]よりも，もう一つ南の山を越えた標高の高いところ（楡林窟は楡林河の上流）に位置している．筆者がまだ調査を行っていない瓜州県の小千仏洞（下洞子石窟．鎖陽城鎮．楡林窟まで南東に 12km）では西夏重修窟が[15]，旱峡石窟（鎖陽城鎮）では西

---

12 姚 2019, p. 7 参照．なお,李甜 2022, p. 243 では，供養人像の服装，持ち物の説明が左右逆転している．李甜 2022, p. 243 に掲載されている写真を見る限り，壁面に向かって左側に交領衣，右側に円領衣の供養人像が描かれていると判断される．

13 敦煌研究院・甘粛省文物局 2011, p. 201 参照．

14 張多勇［2022, pp. 369-370］は，鎖陽城遺跡から多数の北宋期の銅銭が出土していることから，この遺跡が瓜州監軍司の治所だと論じている．

15 李春元 2008, pp. 234-235 参照．

夏重修窟や西夏文題記が[16]，碱泉子石窟（鎖陽城鎮）では西夏文の紙片が発見されているという[17]．これらの情報が事実ならば，これら石窟の位置を『中国文物地図集　甘粛分冊（上）』に掲載されている地図を見ると，旱峡石窟と碱泉子石窟は楡林窟と東千仏洞を結ぶ直線の中間に位置する[18]．これらの石窟が所在する地域まで西夏の支配が及び，瓜州県の石窟群が瓜州監軍司の治所と沙州や粛州を結ぶ交通路の背後を固めるかのように開鑿されているようにも見える．

既に別稿で指摘しているが，西夏で編纂・刊行された百科全書『聖立義海』の山の名称を説明した章の中で，「燕支上山（張掖付近の祁連山脈と推定される）」の説明と「沙州聖山」の説明との間に，「聖変徳山」なる見出し語があり，次のような記述がある．

> 敘𢦏𢦏𢦏 𢦏𢦏敘𢦏𢦏𢦏 𢦏𢦏敘𢦏𢦏𢦏 𢦏𢦏敘𢦏𢦏𢦏[19]
> 聖変徳山 玉体や聖なるものの化身や仏が実際に現れる．民の福を求めるところである．

この記述は，酒泉・玉門・瓜州地域の山地を解説した文章とみられる．『聖立義海』は，乾祐十三（1182）年に西夏の官庁である刻字司が刊行した刊本である．そうしたいわばオフィシャルな刊行物において，この地域の山地を「仏が実際に現れる」という表現していることは，この山地が仏教信仰において重要な場所であることを西夏の中央政府も認識していることを示唆している．そうした山地における仏教信仰を容認ないしは支援しようとする中央政府の姿勢も読み取れるのではなかろうか．

そして，多数の西夏文題記が確認されている莫高窟は敦煌オアシスを潤す宕泉河の上流，西夏時代の重修窟があるとされる五个廟石窟は，同じく敦煌オアシスを流れる党河の上流に位置している．これら石窟は沙州監軍司の管轄下のもとで新造・重修がなされたのであろう．

---

16 李春元 2008, pp. 236-239; 張宝璽 2011; 国家文物局 2011b, p. 310 参照．

17 李春元 2008, pp. 239-201; 国家文物局 2011b, p. 311 参照．

18 国家文物局 2011a, pp. 200-201 参照．

19 佐藤 2016, pp. 56-57 参照．　原文の写真版は Кычанов1997, p. 305 参照．この箇所を Кычанов［1997, p.115］は「賢者の生まれた素晴らしい（場所である）山．玉体，賢く生まれた仏陀の体が真に現れる．（山は）民の無事を祈る場所である」と露訳している．

４．おわりに

このように見ていくと，河西回廊のうち，中部の酒泉オアシス以西の地域においては，オアシスの水源となる川の上流域で石窟の新造・重修が行われていたこと，その事業に西夏の官僚や高僧が関係するものもいくつかの石窟で認められるとともに，その存在は西夏の支配がオアシス地域の背後にある上流にまで及んでいること示唆する傍証となり得よう．

先に挙げた『聖立義海』では，張掖以東の祁連山脈については仏教信仰にまつわる説明がなされていない．その一方で，そうした地域でも多数の石窟寺院が造営されていたことが明らかになっている．現時点で筆者による実地調査の最東端は文殊山石窟であり，それより東に立地する石窟寺院の中に西夏時代に新造・重修されたものがどのくらい確認できるのか，そうした石窟が地理的にどのような場所に立地しているのかを今後調査していきたい．

参考文献（著者名ＡＢＣ順）

荒川慎太郎
2017　「敦煌石窟西夏文題記銘文集成」松井太・荒川慎太郎（編）『敦煌石窟多言語資料集成』府中（東京），東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所，pp. 248-333.

敦煌研究院（編）
1990　『中国石窟　安西榆林窟』東京，平凡社.

敦煌研究院・甘粛省文物局（編）
2011　『甘粛石窟志』蘭州，甘粛教育出版社.

国家文物局（編）
2011a　『中国文物地図集　甘粛分冊（上）』北京，測絵出版社.
2011b　『中国文物地図集　甘粛分冊（下）』北京，測絵出版社.

Кычанов, Е. И.
1997　*Море значений, установленных святыми*. Санкт-Петербург, Центр《Петербургское Воттоковедение》.

李春元
2008　『瓜州文物考古総録』香港，香港天馬出版公司.

李範文
2008　『夏漢字典（修訂版）』北京，中国社会科学出版社.

李　甜
2022　『文殊山石窟研究』蘭州，甘粛教育出版社.

佐藤貴保
2010　「榆林窟第 29 窟男性供養人像に見る西夏の官制―官僚登用制度を中心に―」

『西夏時代の河西地域における歴史・言語・文化の諸相に関する研究（科学研究費補助金　基盤研究（C）　研究成果報告書）』pp. 1-10.
2016 「西夏の河西回廊支配―出土史料からの再検討―」坂尻彰宏（編）『出土文字資料と現地調査からみた河西回廊オアシス地域の歴史的構造』平成 25 年度～平成 27 年度科学研究費補助金（基盤研究(C)：課題番号 25370831）成果報告書，pp. 45-61.
2017 「敦煌石窟西夏期漢文墨書・刻文集成」松井太・荒川慎太郎（編）『敦煌石窟多言語資料集成』府中（東京），東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所，pp. 336-362.
2019 「楡林窟第 29 窟主室西壁西夏供養人像・供養人題記集成（稿）」，佐藤貴保（編）『西夏王国の人名に関する研究―多民族国家における文化交流・融合の視点から―』平成 27～30 年度日本学術振興会科学研究費助成事業（基盤研究（C）：課題番号 15K02906）研究成果報告書，pp. 51-64.
2020 「楡林窟第 29 窟供養人像に見る西夏の河西回廊支配」『比較文化研究』30, pp. 23-43.

姚桂蘭（主編）
2019 『文殊山石窟』蘭州，甘粛人民美術出版社.

張宝璽
2011 「西夏瓜州旱峡石窟」『西夏学』7, pp. 232-234.

張多勇
2022 『西夏監軍司遺址及軍事布局』北京，中華書局.

中国・河西回廊西部の地形の特徴
―― 石窟寺院の立地と関連して ――

島 津　弘

1．はじめに

中国・河西回廊はチベット高原から北へ広がる山脈列の北東縁に沿う北西－南東の走向を持つ低地である．この低地はシルクロードから現在の高速道路・鉄道まで，東西を結ぶ重要な交通路となっている．河西回廊に沿ってはいくつもの石窟寺院が立地している．石窟寺院の立地はこの地域の地形と密接なかかわりを持っていると推定されるため，本稿では河西回廊地域西部の地形の特徴を記述する．

本地域の地形の科学的記述は保柳（1980）がほぼ最初といえよう．保柳（1980）は詳細な地形図が公開されていない本地域において，アメリカの人工衛星ランドサットが取得したデータに基づく衛星画像を用いた地表，地形判読を行い，敦煌周辺の扇状地，砂丘，横ずれ断層などの地形や灌漑耕地などの土地利用を判読し，砂丘の地形配列から卓越風向を推定している．近年になって森谷（2022）が衛星画像と等高線図を用いて，楡林河がつくる扇状地とその周辺の地形を判読し，オアシス・交通路と遺跡の位置関係について検討を行っている．

中国における本地域の地形の研究は疏勒河扇状地扇頂付近の活断層研究が中心で，疏勒河と支流の段丘の年代や活断層の活動度が調査され（王ほか，2004a，2004b，2005），同地域の活断層（F1：後述）は左横ずれで，前期更新世から年 2.8～4mm の速度で活動していること，中期更新世以降は年 2.1mm であることなどが明らかにされている．また，疏勒河扇状地の表層堆積物の SAR を用いた地形判読と OSL 年代測定から最も古いユニットでおよそ 12000 年前，流路跡が確認できるような場所でおよそ 500 年前という年代が得られている（Zhang and Guo, 2013）．地質環境については朽津・段（1992）や谷本ほか（2003）が莫高窟周辺の地質の細かい記載を行っている．本地域を含む中央アジア広域の地質図が日本の産業技術総合研究所地質調査総合情報センターより 300 万分の 1 地質図が発行されている（Teraoka and Okumura, 2007）．

2．調査地域

調査地域は河西回廊北西端に位置する敦煌周辺から酒泉周辺までとする(図 1)．

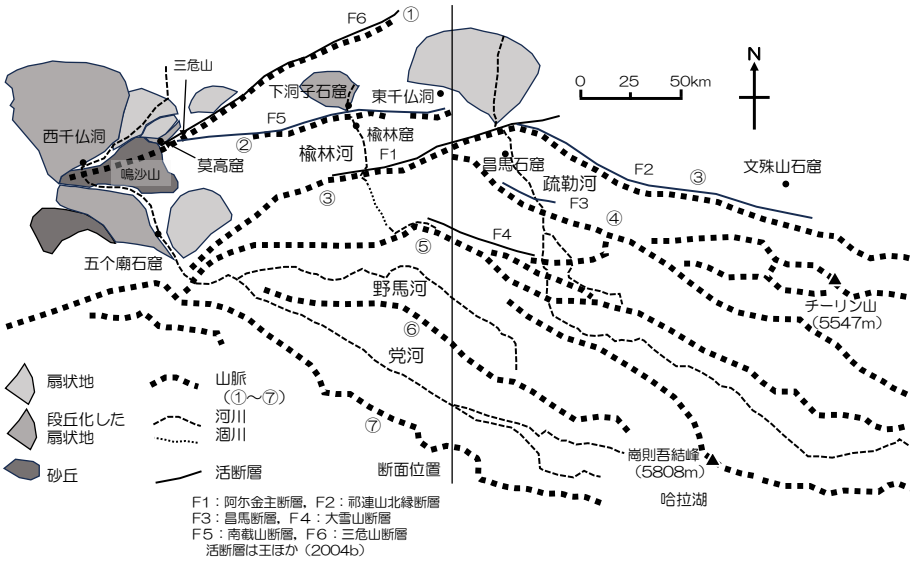


図 1　河西回廊西部の地形分布

河西回廊の南には北西－南西方向にチーリエン山脈が延びている．チーリエン山脈は山脈全体方向にほぼ並行した 7 列の山脈（本稿では山脈①～⑦とする：図 1）と山脈間の低地からなる（図 2）．山脈の標高は 4000m を超え，チーリン山 (5547m) や崗則吾結峰 (5808m) など 5000mを超える山稜があり，

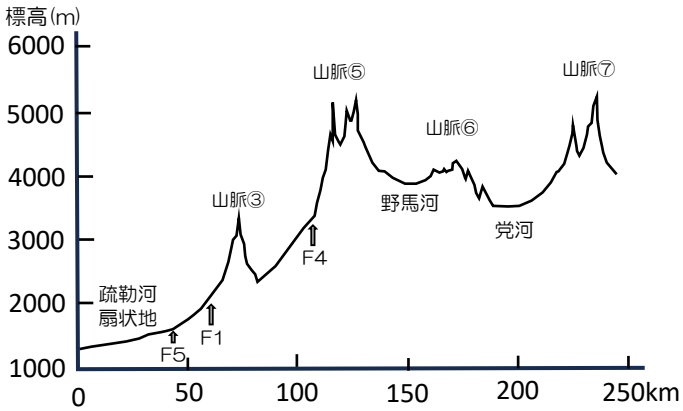


図 2　河西回廊～チーリエン山脈西部の南北断面

氷河も現存している．多くの河川は山脈内部に源流を持ち，山脈間の低地に沿って流れる縦谷を形成している（保柳，1980）．これらの河川は，途中から北流していくつかの横谷を形成し，河西回廊に流入する．低地部分の幅が山脈北部で広くなっており，多くの河川ではこの低地に扇状地状の堆積地形を形成している．

地質は大部分が原生代の変成岩でところどころに古生代の貫入岩が見られる．疏勒河扇頂付近の山脈には前期古生代および白亜紀の地層が分布している．莫高窟近くの三危山を形成するのは，砂岩，泥岩，石灰岩，片岩，片麻岩，ホルンフェルス，大理石と貫入した花崗岩で（朽津・段，1992），堆積岩，変成岩は太古界～古原生界，花崗岩は前期古生代の貫入である（Teraoka and Okumura, 2007）．

３．調査方法

本研究全体ではスペースシャトル SRTM-3（およそ 90m メッシュ）およびだいち 2 号（ALOS-2：およそ 30m メッシュ）のデータを使用した地形判読を行った．判読に当たっては，Google Earth 画像，旧ソ連製 20 万分の 1 地形図を参照した．ただし，本報告書の図は，ALOS-2 データからカシミール 3D を用いて表示させた等高線図および断面図と Google Earth 画像を用いて作成した．

また，2023 年 8 月に実施した現地調査で，西千仏洞，五个廟石窟，莫高窟，楡林窟，昌馬石窟，文珠山石窟が穿たれている堆積物の特徴を記載した．

４．河西回廊西部の地形の特徴

本地域は図 1 のように，主として北西－南東方向に延びる山脈列と山脈間低地からなる．北側の山脈の北縁にはF1～F6の活断層が認められる（王ほか，2004b）．河川が横谷を形成して山脈①～③を越えたところに典型的な扇状地が形成されている．山脈間低地はおそらく礫からなる堆積地形が形成されているが，南側の山脈のそれぞれの谷から流出した礫が低地を埋めており，典型的な扇状地あるいは複数の扇状地が合わさった合流扇状地の地形はなしていない．

典型的な扇状地には，現在も堆積が継続している扇状地（疏勒河や敦煌市街がある党河扇状地）と段丘化した扇状地（西千仏洞付近，楡林河など）がある．衛星写真で見ると段丘化した扇状地上には明瞭な流路跡は認められない．一方で，独立した小山塊である文殊山は地形的には丘陵であるが，堆積物は固化していない．激しい隆起にともなって扇状地に水系が発達し，丘陵となったばかりの場所と考えられ，尾根の高さが一定な背面が見られる．本稿ではこの丘陵を開析扇状地と呼ぶことにする（一般的には段丘化して谷が刻まれた扇状地も開析扇状地という）．扇状地の段丘化は主として北寄りの山脈①～④で生じていることやこれらの山脈の北縁には活断層が通っていることから，断層隆起にともなう下流側における河川の下刻により，すでに形成されていた扇状地が段丘化したもので，より古い時代に形成された扇状地は堆積物が固化する前に隆起し水系が発達することにより丘陵化したと推定される．

５．石窟周辺の地形と堆積物の特徴

各石窟は段丘化した扇状地と現河床の間の段丘崖あるいは開析扇状地と開析谷の間の斜面，丘陵と段丘の間の斜面につくられている．図３にこの範囲の主な石窟周辺の地形断面を示した．

西千仏洞は敦煌市街地の南まで伸びる段丘化した扇状地の扇頂近くに位置し，現河床との間の段丘崖の下半分につくられている．五个廟石窟は山脈③から広がる段丘化した扇状地と現河床の間の段丘崖の下半分に位置している．五个廟石窟の対岸では，段丘化した扇状地上を山脈③から流出する河川が形成した扇状地堆積物が覆っている．現地における観察では段丘崖の上部にも石窟の跡が見られるが崩壊，侵食によって壊されたように見える．五个廟石窟は中径 10cm 以下の亜角礫，西千仏洞は中径 15cm 以下の亜円礫を主体とした礫層に掘られている．マトリクスは細砂～シルトでやや固結している．崩れやすいものの，石窟を掘ることは可能な支持力を持っている．両者とも下部はやや固結しているものの，上部，表層部は極めて崩れやすい堆積物であった．堆積物の境界が明瞭か漸移するものかを今後確かめる必要がある．

莫高窟は最も北側の山脈①を超えた横谷の出口に形成されている段丘化した扇状地の扇面（砂丘砂が覆う）と現河床の間の段丘崖に位置している．石窟の大半は段丘崖の下半分に位置しているが，中心的建物の九層楼は段丘崖の上までを覆うように造られている．莫高窟がある大泉河の段丘化した扇状地堆積物は山脈①の三危山から供給されたと考えられる中径 5cm 以下の鋭く割

れた角礫からなる．マトリクスはシルトが主体で党河扇状地堆積部と比べてやや固結度が高い．谷本ほか（2003）は崖の堆積物中の砂が鉄分と CaCO3 でコーティングされ，硬化していると述べている．

榆林窟は山脈②の上流側の近い場所に位置し，段丘化した山脈間低地とそこからわずかに突き出た残丘と河道との間の段丘崖に石窟がつくられている．榆林窟は中径 20cm 以下の亜角礫〜亜円礫を主体とした礫層に掘られている．この礫層には扁平で角ばった小礫層を挟む．マトリクスは細礫が主体でやや固結しており，党河の段丘崖より固結度が高いと推定される．河床にはかなり固結度が高い堆積物が見られ，ノッチ状の侵食跡が見られる．より下層が固結している可能性がある．

以上の石窟は現河床ぎりぎりの位置にもつくられており，増水時の影響を強く受けると推定される．石窟造成時の河床の位置は不明であるが，一般的には下刻傾向にあるため，現在の河床の位置が当時より大きく上昇したとは考えられない．なぜ，浸水のリスクがある場所にも石窟がつくられたのか，検討する必要がある．

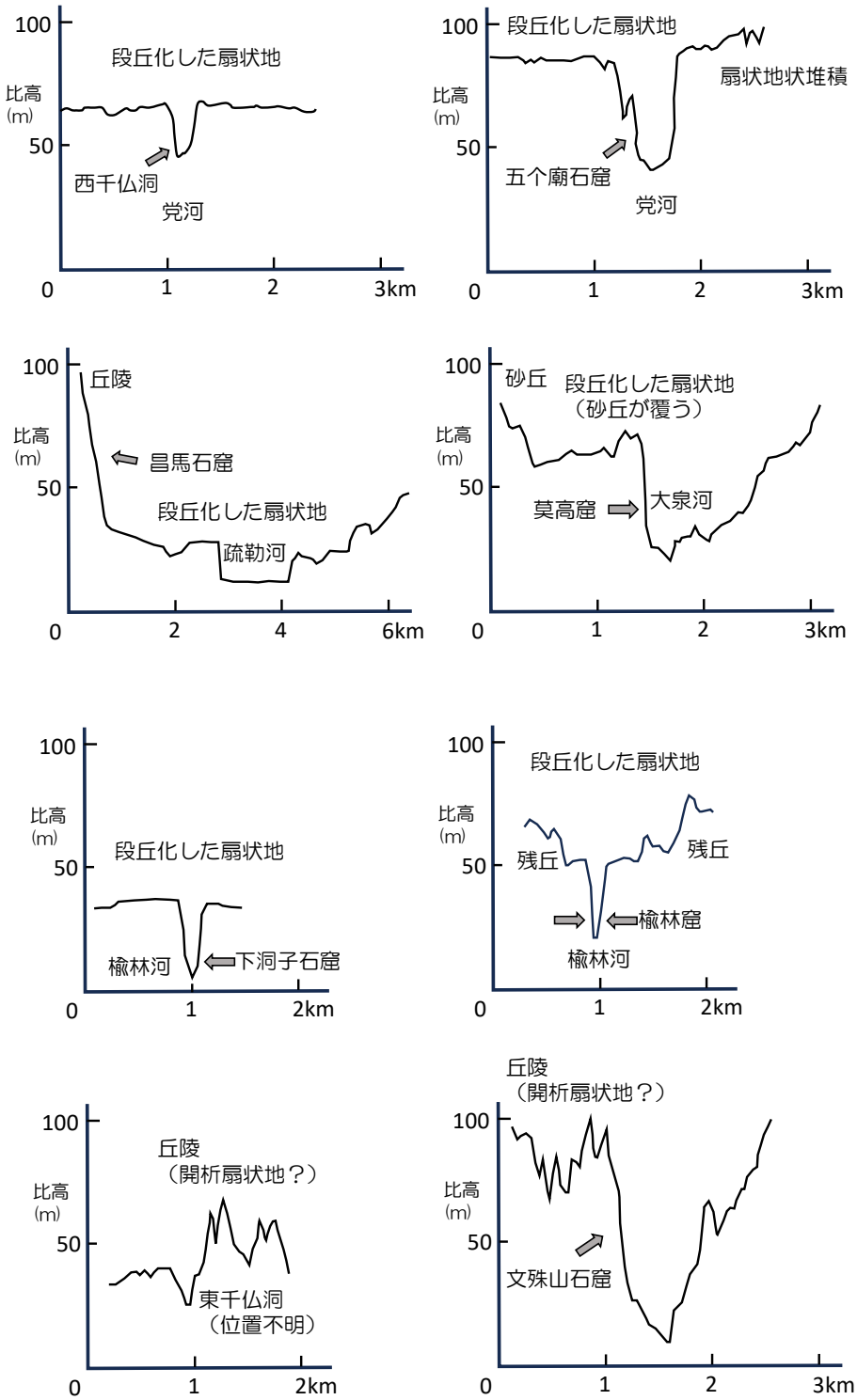

100
比高
(m)
50
0
段丘化した扇状地
西千仏洞
党河
1
2
3km
段丘化した扇状地
扇状地状堆積
五个廟石窟
党河
丘陵
昌馬石窟
段丘化した扇状地
疏勒河
4
6km
砂丘
段丘化した扇状地
（砂丘が覆う）
莫高窟
大泉河
段丘化した扇状地
榆林河
下洞子石窟
2km
段丘化した扇状地
残丘
残丘
榆林窟
榆林河
丘陵
（開析扇状地？）
東千仏洞
（位置不明）
丘陵
（開析扇状地？）
文殊山石窟

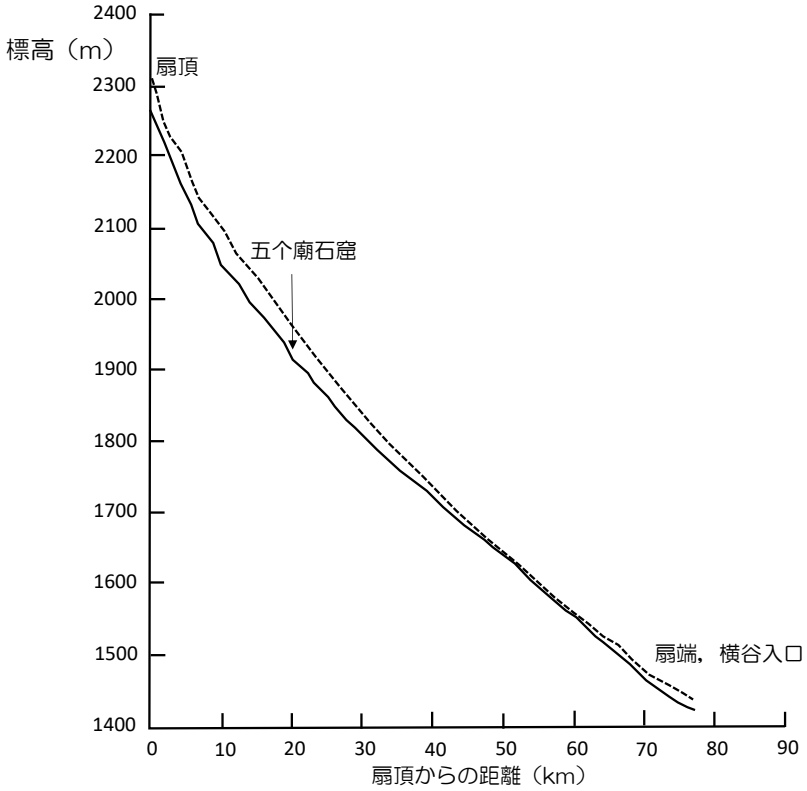
図３　石窟の地形断面図

昌馬石窟は丘陵と段丘面の間の白亜紀の堆積岩からなる急斜面につくられた石窟で，段丘崖につくられた石窟とは異なっている．また，現在の地表から25m ほどのかなり高いところにつくられているのも異なっている．ただし，急斜面の基部は斜面から崩落した崖錐堆積物に厚く覆われているため，その下に石窟が全くないのかどうかは不明である．丘陵を構成する岩盤は細かく割れるとともに，大きくブロック状にも割れている．細かく割れることから掘ることができるとともに，比較的支持力があり，石窟としては維持されやすいと推定される．一方で，1932 年 12 月 25 日の地震で大きく崩れたとのことである．また，2023 年 7 月にも崩れたとのことである．きっかけがあると大きく崩れる可能性がある．

文珠山石窟は開析扇状地と開析谷との間の急斜面に掘られている．場所によって異なるが見学した石窟は 15cm 以下の亜円礫層の場所と 5cm 以下の亜角礫〜亜円礫層に掘られている．全体的に崩れやすく，表面にガリーが多数刻まれている．残存している石窟はマトリクスがシルト〜粘土で比較的固結度が高い場所に位置しているが，ほとんど崩れ去った石窟も多数見られた．

以上の石窟が立地する地形と堆積物・地質は，いずれも掘りやすい堆積物・地質で，崩れない支持力のある岩盤かやや固結している堆積物であること，石窟をつくることができる十分な比高があり，厚みのある堆積物が露出しているという点では共通している．しかし，その特徴はかなり異なっている．中でも規模が大きい莫高窟は固結度が高く最も崩れにくい堆積物を掘ってつくられていることが分かった．

今後は，段丘崖が続く中でなぜそのような場所が選ばれたのかも検討する必要がある．段丘崖の比高がどのように変化するのかを縦断的にとらえた断面図を作成した（図 4）．堆積物の特徴と合わせて，つくりやすい，あるいは崩れにくい比高が存在するかなどの視点も必要であろう．



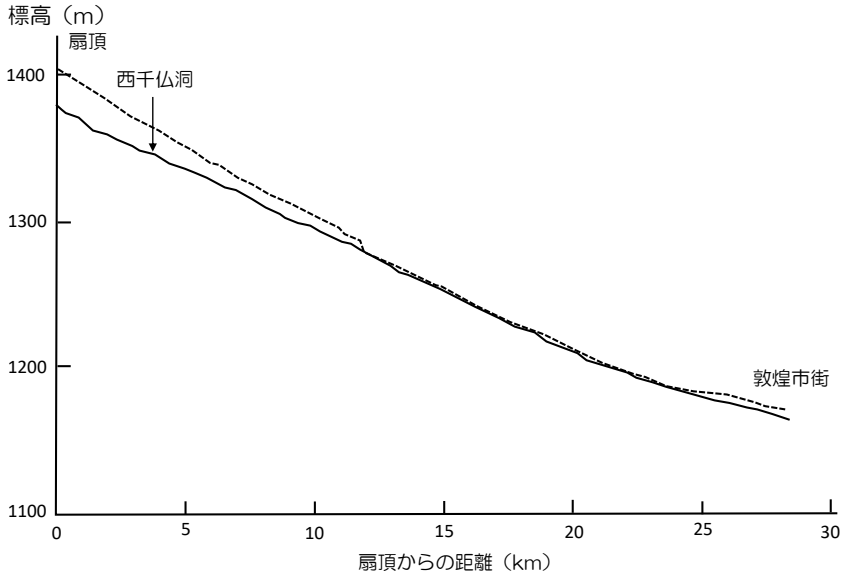


図４　党河上流側および下流側の段丘・河床縦断投影図

参考文献

朽津信明・段　修業（1992）：敦煌莫高窟の地質環境．保存科学，31，79-85.

谷本親伯・朴　春澤・小泉圭吾・岩田修一・舛屋　直・李　最雄・王　旭東（2003）：敦煌，莫高窟周辺の地質と水文－リモートセンシングと断層調査．材料，52-5，523-528.

保柳睦美（1980）：敦煌を中心とする地域の自然環境．『講座敦煌 1　敦煌の自然と現状』大東出版社，1-62.

森谷一樹（2022）：河西回廊における遺跡・交通路・オアシスの位置関係－漢代・唐代の敦煌と瓜州を中心に.『中国前近代の関津と交通路』京都大学学術出版会，175-194.

Teraoka Yoji and Okuura Kimio (2007): Geological map of central Asia 1:3,000,000. Geological Survey of Japan, AIST.

Zhang Lu and Guo Huadong (2013): The temporal-spatial distribution of Shule river alluvial fan units in China based on SAR data and OSL dating. Remote Sensing, 2013, 5, 6997-7016; doi:10.3390/rs5126997

王　萍・盧　演俦・丁　国瑜・陳　傑・Karl-Heinz Wyrwoll（2004a）：甘粛疏勒河沖積扇発育特性及其対構造活動的响位．第四紀研究（中国），24-1，74-81.

王　萍・盧　演俦・陳　傑（2004b）：阿尔金断裂帯東段晩更新世階地沉積物紅外釈光測年及其構造意義．地震地質，26-4，716-726.

王　萍・盧　演俦・陳　傑（2005）：阿尔金主断裂東端第四紀左行走滑的新証据．地震地質，27-1，55-62.

河西石窟調査行動記録（2023 年度）

佐 藤　貴 保（記録）・坂 尻　彰 宏（編集）

８月 20 日（日）出国

調査に参加する赤木崇敏・岩本篤志・橘堂晃一・坂尻彰宏・佐藤貴保・島津弘は，成田国際空港で各自チェックインし，搭乗口で合流．

16:40 西安行き航空便離陸．

19:50 西安咸陽国際空港着陸．天気は雨．入国審査にやや手間取る．空港内のホテルにチェックイン．

８月 21 日（月）粛北・五个廟石窟調査

4:30 ホテルをチェックアウト．第 2 ターミナルに移動．空港内は人が多い．

6:10 敦煌行き航空便離陸．席は 9 割がた埋まる．若い人が多い．今年はコロナ規制がなくなり, 7 月から個人で敦煌に旅行する人が激増しているものの, 団体客は大幅に減っているらしい. 昨日の雨はあがっている. 離陸後すぐに

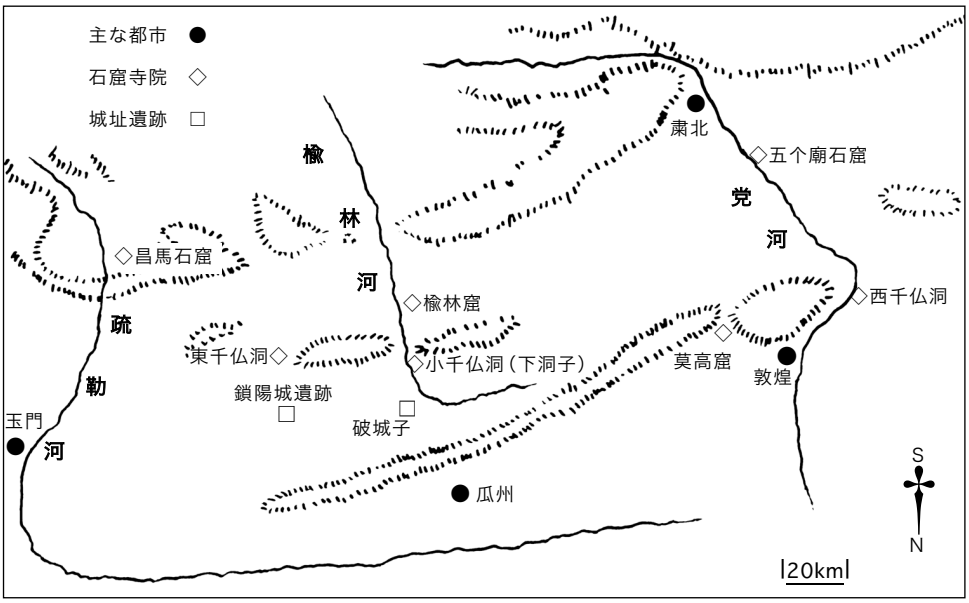


図１　敦煌オアシス地域の石窟の分布

雲に覆われ，黄河を渡る頃から雲が切れ始める．祁連山脈の上を飛ぶ．南斜面の雪はあまり多くない印象．

8:25 敦煌莫高空港に着陸．天気快晴，気温 22℃.

8:50 ワゴン車で空港を出発．敦煌市街までの道中，甘粛省以外の省からの自家用車を多く見かける．この後，敦煌滞在中にチベットと香港，マカオ，吉林以外の自家用車を見かけた．G213 は，途中からバイパスに切り替わっており，市街地を通っていない．

9:05 ホテル着．ロビーでミーティング．

9:56 ホテルを出発して車で西へ向かう．敦煌の郊外には葡萄，トウモロコシ畑が広がる．

10:10 七里鎮をすぎて周囲は砂漠になる．

10:21〜33 光電園展望台から太陽熱発電所を見学．

10:47 西千仏洞前を通過．左手に党河ダムが見える．この後，玉門関への道，陽関への道と分かれ，上り坂を西へ進む．10:58 陽関駅前通過．

11:01 柳格高速沙棗園 IC から G30 に乗り粛北へ向かう．対向車は無く，車 1 台に抜かれただけ．

11:13 高速本線を離れ，粛沙一級公路（S12）に入る．周囲は半砂漠．

11:37 五个廟 PA 通過．進行方向左奥の山脈に雪が見える．傲包あたりから左手に草地が増えてくる．

11:54 旧道（G571）と合流．その後党河を渡る．川の水は多くが用水路に運ばれている．

図２　五个廟付近の党河の渓谷

12:13〜14:07 粛北に到着後に昼食．天気晴れ，12:00 の気温 25℃.

14:10〜16 党河の橋を渡る手前の巴音路 35 番地で党河を観察．その後高速道路への道を戻り，S303 に入る．

14:39〜49 五个廟展望台で党河の渓谷を見る．ここから石窟は見えない．対岸に数本の砂嵐が見える．4m 位の西風が吹いている．

図３　五个廟石窟

14:55 五个廟石窟駐車場で下車．党河河岸まで下りて石窟を下から遠望．

15:37 車に乗って西千仏洞へ向かう．高速道路への道が壊されており，S12 経

由で 16:10 に粛北 IC に入る．

16:42 沙棗園 IC で下りて，G213 を東へ．西千仏洞の開放時間に間に合わず．翌日訪問することにする．

17:40 ホテル着．天気快晴，21:00 の気温 19℃．

8 月 22 日（火）莫高窟・三危山・西千仏洞調査

7:30 天気快晴，気温 17℃．

8:38 ホテルを出発．

8:50 敦煌莫高窟数字展示中心の前を過ぎる．中心の駐車場に多くの車が止まっている．一般客はここからシャトルバスで莫高窟に向かう．

9:07 莫高窟前駐車場で下車．シャトルバスが 30 台ぐらい止まっている．ここから敦煌研究院の許可を得て三危山へ向かう．

9:57 三危山の麓の仏塔に着く．側に地震観測所がある．

10:40 さらに登って南天門に着く．莫高窟を見下ろす．天気曇り，東風が強い．ここから別の道を歩いて下山しようとするが，舗装道路が数年前の大雨で崩壊し，崩れた道路跡を慎重に歩き，11:45 に麓に戻る．

12:15 駐車場に戻る．そのあと敦煌石窟文物保護研究陳列中心を 13:00 まで見学．館内はごった返す．

13:15 九層楼（莫高窟第 96 窟）前で莫高窟を遠望．莫高窟は世界ジオパークにも登録され，近くの科普広場に説明板多数．

図 4　南天門から莫高窟を望む

13:35 駐車場を出発．敦煌市街へ向かう．

14:02〜38 敦煌市街で昼食．その後西千仏洞へ向かう．途中 15 分ほど車の給ガスで停車．

15:33 西千仏洞到着．駐車場から党河河岸の入口に向かう．羊が放たれている．

16:00〜26 第 19 窟を調査．石窟番号は霍熙亮番号．なお，西千仏洞の石窟番号の整理の経緯については樊・蔡 2007 参照．

図 5　西千仏洞

16:27〜50 第 16 窟を調査．

17:04 乗車して瓜州に向かう．天気快晴，気温 24℃．

17:17 七里河鎮の手前で右折し，鳴沙山沿いを走る．月牙泉前は混雑．
18:02 敦煌 IC で高速道路に乗る．
18:50〜19:04 瓜州 SA で休憩．ハミ瓜は 1 個 25 元と高い．
19:17 瓜州南 IC を出る．道端で瓜売りの露店がいくつか出ている．トウモロコシの収穫が進んでいる．
19:30 瓜州のホテルに到着．気温 21℃．

8 月 23 日（水）楡林窟調査

9:05 ホテルを出発．天気快晴．8:25 の気温 18.3℃．
9:19 瓜州南 IC 前通過．東側にメロンやスイカを露店が数店．青海，四川など甘粛省以外の省の自家用車とよくすれ違う．最初の山に入ると，ゴビの方舟なるモニュメント，続いて漢の武帝の顔の塑像が数 km の間隔で置かれている．山を下りると大地之子の像に多くの人が群がっている．半砂漠の中のタマリスクがところどころ花を咲かせている．
9:45 鎖陽城鎮のロータリー通過．ここにも露店が出ている．この先の道路は舗装がはがれてガタガタの道が数 km 続く．
10:22 楡林窟に到着．天気快晴．川岸の入り口へ向かう．
10:59〜11:45 第 12 窟を調査．調査中，多くの観光客を見かける．今年は 1 日 2600 人も観光客が来場した日もあったらしい．
12:38 楡林窟を出発．

図 6　楡林窟

13:00 楡林ダムへの道との分岐点の少し東で「小千仏洞」と書かれた文物保護単位の標識を発見．小千仏洞は下洞子石窟の別名である．そのままダムの方へ向かう．ダムへの道は未舗装．
13:11 楡林ダムの手前で引き返す．水はほとんど用水路に流れている．用水路の水の流れはとても速い．
13:45 楡林窟への道の分岐点に戻る．
14:00〜53 鎖陽城鎮のロータリー近くで昼食．天気曇り，気温 24℃．東風 3〜4m．昼食後，瓜州に向けて出発．途中，車の不具合で 30 分ほど停車．
15:56 瓜州南 IC 前通過．
16:20〜17:07 県政府前の瓜州県博物館を見学．民国期の酒泉地域の地図を展示する企画展を観覧．
17:15 ホテルに到着．19:00 の気温 26℃．

8 月 24 日（木）鎖陽城遺跡調査

9:02 ホテルを出発．天気曇り，気温 14℃．東の風 2〜3m．事情により，本日予定していた東千仏洞の調査は取りやめ，鎖陽城遺跡の調査のみとする．

9:16 瓜州南 IC 前通過．鎖陽城遺跡まで 44km の標識あり．

9:44 鎖陽城鎮のロータリーを左折．X270 号線を東に進む．トウモロコシ畑は農豊村辺りまで続くが，そのあと半砂漠や草原が広がる．鎖陽城遺跡が近くなると，ポプラ並木とタマリスクの半砂漠が現れる．

10:06 鎖陽城遺跡の駐車場に到着．天気は曇り，気温 19℃．東風 5m くらいだが，だんだん強くなり，砂埃が舞う．遺跡は開場しているが，見学に必須な電動カートの始発は 10:30 とのことで，しばし待機．見学者は 30 人くらい．

10:30 カートで遺跡へ．内城西北角の城壁に上がる．

11:00〜25 カートに再び乗り，西の塔児寺へ．現在発掘調査が進んでおり，その成果がカート乗り場に掲示されている．

11:45 鎖陽城遺跡を出発．

12:03〜13:00 鎖陽城鎮で昼食．

13:05〜37 破城子遺跡の外周を調査．外周が柵に覆われている．城壁の崩落を防ぐために，下部を木材で支えているところもある．

14:15 瓜州市街中心部の玄奘取経博物館に到着するも，管理人が不在で引き返す．途中でこの地特産の白いメロン（銀蒂）やハミ瓜，スイカを買う．

14:40 ホテル着．天気晴れ，16:00 の気温 20℃．

8 月 25 日（金）昌馬石窟調査

8:00 ホテルを出発し，淵泉街をしばらく東に向かう．天気快晴．途中「玄奘大道」なる大通りを横切る．

8:17 瓜州 IC から連霍高速（G30）に乗る．入口に多数のトラックが並んでいる．高速に上がると，右手に畑，左手に砂漠が広がる．5km ほど進んで敦煌へ向かう柳格高速と分かれると，右手も砂漠に変わる．

8:53 右手にのろし台．このあたりから進行方向の右 10km ほど先に林が連なって見える．高速鉄道の高架をくぐり，すぐに鉄道の蘭新線をまたぐ．

9:02 橋弯西 IC 通過．その後，進行方向右に河道が見える．地図によると，疏勒河らしいが，水は流れておらず，川床とみられる窪地には緑が広がる．

9:07 橋弯 IC 通過，右手に橋弯城が見える．左右は砂漠，左手には多数の風車が見える．

9:20 この先しばらく，道路の左右にベニバナやヒマワリの畑が広がる．10km ほど進むと，進行方向の右奥に山影が見える．疏勒河を渡る．川幅は数 m．

9:41 玉門 IC で高速を降り，市街地の右端を南下する．G312 に入る．天気曇り．路面がぬれており，直前まで雨が降っていたらしい．トウモロコシ畑が広がる．このあと，風光大道に入り，再び鉄道の蘭新線をくぐって南下を続けると，「大唐玉門風電場」なる風力発電のエリアに入り，風車が道の左右に無数に立っている．

10:03 風光基地を左折し，S 238 に入る．4km ほど進むと左手に小規模な水力発電所が 2〜3km おきに現れる．上り坂が続き，途中で坂が急になる．斜面は半砂漠．ラクダ 1 頭を目撃．道は山の中を縫うように走る峠道に．斜面には砂防ダムが建設されている．「車路溝大坂」が峠で，そのあとは下り坂が続く．

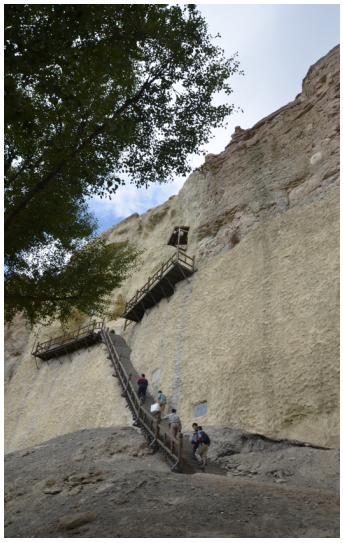


図 7　昌馬石窟

10:50 昌馬石窟着．周囲には小麦畑が広がり，収穫の真最中．駐車場には日本語の説明文も併記された観光案内板がある．

10:59〜11:35 急な階段を上り，第 2 窟を調査．天気は曇り．北東方向にダム湖が見える．

11:35〜12:17 第 4 窟を調査．

12：32 昌馬石窟を出発．まもなく小雨が降り出す．

12:44〜13:33 昌馬村で昼食．昼食後，嘉峪関市に向けて出発．

図 8　昌馬石窟からの眺望（東向き）

14:22〜27 休憩．東に水力発電所が見え，その奥には崖が見える．砂漠だが，角の無い石が多い．

15:00 鉄道の蘭新線をくぐって G312 に入る．

15:03〜26 玉門 SA で休憩．

15:43 玉門 IC を通過．周囲は砂漠になり，風車も無くなる．この先，進行方向の右手に高速鉄道，左手に高速道路を見ながら，緩やかな上り坂が続く．

15:58 赤金 IC から高速道路に入る．左手 5km ほど先に赤い山が見える．6km ほど進むと進行方向の右手に耕地，左手に草原が広がる．さらに 8km ほど進むと左手も耕地に変わるが，その後 30km ほど進むと再び周囲は半砂漠となる．10km ほどで下り坂になり，左手にトウモロコシ畑が広がりだす．右

手に並走する G312 は長い渋滞.

16:45 黒山湖 IC で高速を下り，G312 に入る．ダムの手前で酒泉へ向かう G312 と分かれ，嘉峪関へ向かう X257 に入る．周囲は半砂漠.

16:53 進行方向の左手に火力発電所，つづいて嘉峪関の城郭が見える．蘭新西路から嘉峪関市街地に入る.

17:03 ホテルに到着．天気曇り.

8 月 26 日（土）文殊山石窟調査

7:33 ホテルを出発．天気快晴．南に向かう．南湖地区を通過し観礼古鎮に入る際に水たまりを渡るが，これが北大河の本流であるらしい．次第に山が迫ってくる．その後 S305 に入り左（北）に線路とその奥に畑，右に木の生えていない山を見ながら上り坂を進む．8 時過ぎに右折して祁豊河大橋を渡る．橋の下を流れる洪水河は水流が無い．川原幅は 150m くらい．下流側はその幅がもっと広い．左右にチベット文字と漢字を併記した店の看板が増えてきた．粛南裕固族自治県祁豊蔵族郷に入ったとみられる．洪水河の河道と並走しながら車は上る.

8:17 文殊山石窟の後山区に到着する．券売所の観光案内版は中国語・英語・チベット語・韓国語で書かれている.

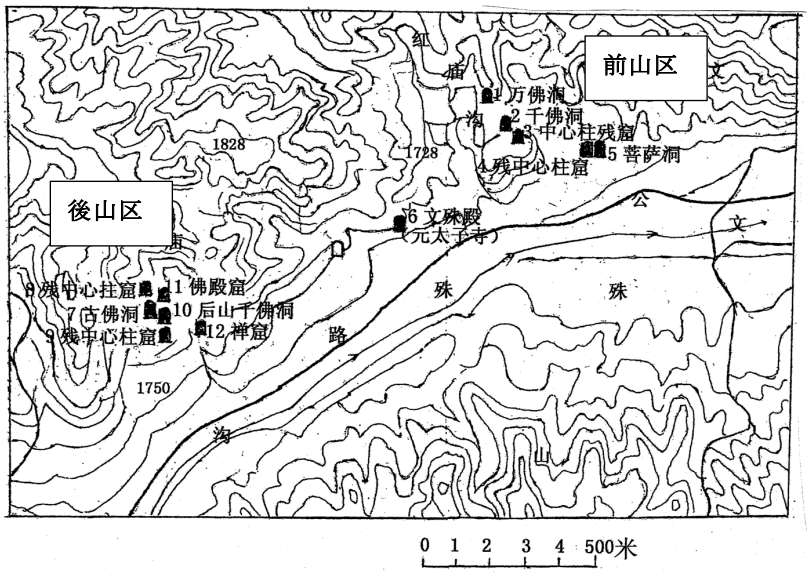


図 9　文殊山石窟分布図（張 2016, p. 98，図 1 に加筆）

8:30〜44 入場して後山千仏洞入口で職員を待つ．境内は観光用に整備がされている．待機している間に北魏時代開鑿という開放窟を見るが，近年重修されたものとみられる．なお，現状では文殊山石窟の石窟番号は必ずしも統一されていない．以下に主な研究書の石窟番号の対照表（表 1）を掲載する．本記録では通称と『河西北朝石窟』と『文殊山石窟』の番号を用いる．両書ならびに『文殊山石窟研究』の書誌は本記録の文献表参照．

表 1　文殊山石窟番号対照表（李 2022, p. 102, 表 3-1 を基に作成）

『河西北朝石窟』 『文殊山石窟』	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12
『文殊山石窟研究』	19	29	30	32	31	x	73	77	67	69	70	88
通称	前山万仏洞	前山千仏洞			文殊殿		後山古仏洞			後山千仏洞		後山禅窟

9:35〜41 後山古仏洞（第 7 窟）調査．
9:44〜58 後山千仏洞（第 10 窟）調査．
10:03 車で前山区へ向かう．
10:10 前山区前で下車．
10:14〜48 前山万仏洞（第 1 窟）調査．
10:51〜11:09 前山千仏洞（第 2 窟）調査．
11:16 酒泉へ向け出発．
11:32 祁豊河大橋を渡って直進し，嘉峪関市文殊村に入る．周囲は梨やネクタリンが栽培されている．次の塔湾村からはトウモロコシやヒマワリの畑が広がる．途中，張掖空港から西安へ向かう飛行機（所定 17:25 発）の出発が 2 時間遅れるとの連絡が入る．

図 10　文殊山石窟後山区

11:49 酒泉市粛州区の市街地に入る．
12:10〜13:40 市街のレストランで昼食．天気快晴．食事後粛州路を南下し酒泉 IC で高速に乗る．周囲にトウモロコシ畑が広がる．
13：49 酒泉東 JCT 通過．宇宙センターへ向かう高速道路と分かれる．
13:55 総寨 IC あたりで右手に祁連山脈がところどころ雲に隠れながら見える．

山頂部に積雪がある．10km ほど進むと上り坂になり，畑が尽き，砂漠が広がる．下河清 IC を過ぎたころから下り坂になり，左手にも山が見えてくる．右手の山の麓は林が続いている．清水 IC を過ぎると左右に畑が広がるが，6km ほど進むと周囲は半砂漠となり，それが 6km ほど続く．さらに 5km ほど進むと進行方向左手遠くに大きな緑地帯が見え，その奥にうっすらと山脈が見えた．右手は砂漠が広がる．この後，梧桐泉 IC まで下り坂が続き，左手の緑地が次第に近づいてくる．右手は半砂漠．いったん上り坂になるが 7km ほど進むと再び下り坂に．

15:07〜37 高台 SA で休憩．スイカを食べる．トラックや行楽客とみられる自家用車で駐車場はほぼ埋まっている．SA の周辺は半砂漠．出発後 20km ほど進んだあたりから再び両側に農地が広がる．

16:01 臨沢 IC 通過．丹霞 IC 過ぎると，進行方向左手に山脈がはっきり見えるようになる．甘州 IC を過ぎてすぐに黒河にかかる橋を渡る．黒河の水は数 m の幅でわずかに流れている．張掖の市街地の南端を通過していく．

16:33 張掖東 JCT で西寧方面へ向かう張汶高速（$G06_{11}$）に入る．「扁都口 88km」と標識にはある．周囲は農地が広がる．扁都口に近い山丹軍馬場は近年民営の牧場に変わり，扁都口も外国人が訪問できるという．

17:13 張掖空港到着．天気曇り．

19:35 西安に向かう航空便離陸．窓から砂漠の中に円形の明らかに人工的に作られた耕地が見える．収穫はすでに終わっているようである．頂上付近に積雪のある祁連山脈上空を飛び，その後日没となり，20:30 頃には蘭州の市街地と思われる細長い街の夜景が見えた．

20:57 西安咸陽国際空港に着陸．天気は雨．気温 22℃．空港内のホテルへ．

8 月 27 日（日）帰国

9:20　帰国便が西安咸陽国際空港から離陸．天気雨．

14:20　成田国際空港に着陸．天気曇り．着陸前からゲリラ雷雨が起きている箇所が視認できた．気温 29℃．到着ロビーにて解散．

【文献表】

樊錦詩・蔡偉堂 2007「敦煌西千仏洞各家編号説明」『敦煌研究』2007-4, pp. 34-35.

張宝璽 2016『河西北朝石窟』上海, 上海古籍出版社.

姚桂蘭（主編）2019『文殊山石窟』蘭州, 甘粛人民美術出版社.

李甜 2022『文殊山石窟研究』蘭州,甘粛教育出版社.

執筆者紹介（ABC 音順）

赤 木　崇 敏（Takatoshi AKAGI）東京女子大学・現代教養学部・教授

橘 堂　晃 一（Koichi KITSUDO）龍谷大学・研究員

坂 尻　彰 宏（Akihiro SAKAJIRI）大阪大学・全学教育推進機構・准教授

佐 藤　貴 保（Takayasu SATO）盛岡大学・文学部・教授

島 津　弘（Hiroshi SHIMAZU）立正大学・地球環境科学部・教授

田 林　啓（Kei TABAYASHI）大阪市立美術館・学芸員

電子版の公開と著作権

本報告書に掲載された記事は，大阪大学機関リポジトリである大阪大学学術情報庫 OUKA　(Osaka University Knowledge Archive) において，電子化された状態で無制限かつ無償で公開される．ただし，OUKA での公開による著作権の移動は一斉発生せず，OUKA を主管する大阪大学附属図書館は，電子化にともなう公衆送信権と複製権の許諾を得るのみである．

坂尻彰宏（編）
「石窟史料からみた敦煌オアシス地域の研究」

2020 年度～2023 年度科学研究費補助金（基盤研究（B））
「石窟史料からみた敦煌オアシス地域の研究」（課題番号 20H01326）成果報告書

2024 年 3 月 25 日 印刷
2024 年 3 月 29 日 発行
発行者：研究代表者　坂尻彰宏（大阪大学）
〒560-0043 豊中市待兼山町 1-16　大阪大学全学教育推進機構
印刷所：オリンピア印刷株式会社
〒550-0002 大阪市西成区江戸堀 2-1-13-6F